

考古学者と弥生土器 一八八四〜一九九五年論

酒 井 龍 一

世界史

小玉新次郎「バルミラが繁栄時代を迎えた紀元一世紀は、世界史上、実に意義深い時代であった。中国では漢帝国が前漢（前二〇二〜後八年）から後漢（二五〜二〇〇年）へと変わり、ヨーロッパでは長年に及んだローマ共和国が改まってローマ帝国が成立（前二七年）していった。（『隊商都市バルミラの研究』一九九四年）

バルミラは、シリア砂漠のオアシスに栄えたシルクロードの有名な隊商都市。私はここ数年間、本業の弥生研究を離れ、バルミラ碑文の独習に努めていた。わが日本隊は毎年、なぜか真夏に遠征する。従って、摂氏四〇〜五〇度。灼熱地獄である。西暦一〇八年と一二八年に建造された壮大優美な地下墓を発掘。今後も調査は継続されるが、私は多くの思い出を胸に御役御免。本書執筆を契機に、弥生研究に復帰した次第である。

西暦一〇八年・一二八年といえは、日本列島は弥生時代。その後期にあたる。バルミラは前一世紀に繁栄し始め、後三世紀には頂点を迎えた。その時、おごれる女王・ゼノビアが登場。ローマ帝国に反抗し、反撃を受け西暦二七三年に

滅亡。廃墟となって砂漠に埋もれた。その繁栄と挫折の数百年は、弥生中期から邪馬台国の女王・卑弥呼の時代に相当する。となれば私も、あながち弥生研究から全く脱落していたと卑下する必要もない。

心機一転。個性豊かな考古学者の言動に触れつつ、百年にわたる弥生土器の研究史の紹介に努めたい。失礼ながら、麦酒片手に、モーツアルトのバイオリン協奏曲第五番「トルコ風」を、脳を切り裂くような西崎崇子のバイオリンで聴きながらである。

学史

ヘレマンズ「この本は、科学の進歩を、直線的に発展するものとは考えていない。むしろ、川の流れのように、曲がりくねって小さな川と合流しながら大河となっていくものと、捉えている。（『科学年表』知の五〇〇〇年史』一九九三年）

最初の弥生式土器が発見された一八八四（明治一七）年から今年（一九九五（平成七））年まで一三一年を数える。百年の研究史には、本流・支流・分流等、いく筋もの流れがある。ただし実際の河川と違い、いずれを本流と見るかで意

見は分かれる。関西人を自認する私は、浜田耕作による「型式編年学」の提唱に起點し、小林行雄の「唐古五様式論」や佐原真の「製作技術論」を経て今日に至る流れを本流と見る。あくまで個人的体験に基づく私見である。

例えば、関東に始原した「弥生町・弥生式土器論」は、不運にも縄紋的世界における流れ。弥生研究の本流になりえず、伏流水として学史世界を豊かに潤す。中山平次郎の「本場・北部九州土器論」は、小林行雄の天分が勢いを弱めたが、以降、その情熱は当地で様々に継承されている。また、後日、縄文研究に没頭する山内清男の若き日の「みちのく・粉痕土器論」は、近年、青森での前期水田の発掘によって再評価が始まったばかり。この他、全国津々浦々に様々な流れもあるが、紙面の都合上、言及することはない（各自でされたし）。各流とも、研究が大きく展開する急流の時と、反対に膠着状態となる澁みの時があり、すべて現在に至っている。

前半期・後半期

一九三七年 東洋史―北京原人の頭骨が発見される

研究史は、特異年である「一九三七年前後」を境に、前半期と後半期に大きく二分される。共に五〇年余。同年、かの末永雅雄が奮闘し唐古遺跡を大発掘。「弥生文化Ⅱ稲作文化」と「弥生土器Ⅱ五様式体系」に関する物証を得た。一九三六年の森本六爾の急死で危機を迎えた「弥生式土器聚成図録」を、一九三八年に小林行雄が情熱をもって完成。いずれも弥生研究の節目となる出来事であった。一個の弥生土器発見に端を発した前半期の五〇年は、いわば『聚成図録』を目指す流れ、唐古発掘で大河となった後半期の五〇年は、いわば今日の状況を目指す流れと例えられる。

今日の状況

日本考古学協会会長―今や日本全国で考古学の調査研究に従事する研究者は五〇〇〇人を越え、…。(『日本考古学』一九九四年)

一九四八(昭和二三)年四月二日。会員八一名で発足した日本考古学協会は、四六年目にして会員は五〇〇〇名を越えた。わが日本はまさに考古大国である。念願の機関誌『日本考古学』も創刊。その中園聡「弥生時代開始期の壺形土器」は、弥生土器に関する最新かつ注目の論文である。論旨は単純。最古の弥生壺と朝鮮無紋壺を比較し、最古の弥生壺は縄文人が製つたとみるもの。九州大学の中園は期待される弥生研究の新進気鋭。同大学には、ケンブリッジ留学組の溝口孝司等、先進的な研究者が多い。

この論文の特徴は、モーターハビット・ハビトウス・モーターパフォーマン・ス・デンドログラム・スコアー・サイズファクター・シェイプファクター・メンタルテンプレート・マトリクス・形態パターン・置換可能なアイスポジションの体系・マンセル記号によるデータ・ハコヒゲ図・歴史的コンテキスト・地理的クライン・認知構造・形態生成構造・多変量解析・累積寄与率・因子負荷量・象徴的意味・数量化理論Ⅲ類等、旧来の考古学者を錯乱させる意味不明の用語が乱舞すること。ブルデュー等、今時の難解な社会学者の認識も重要な役割を果たしている。中園論文が象徴するように、今や様々な学際的知識がないと、弥生土器の論文すら理解できない状況を迎えつつある。

坪井正五郎・有坂紹蔵・時田鎗次郎・中山平次郎・森本六爾・小林行雄・杉原莊介等、歴代の識者が今日の状況に遭遇すれば、感嘆の声をあげるか、苦悩に歪む表情をみせるのか、はたまた時の流れと無表情でやり過ごすのか。すべ

ての始原から語ろう。

始原

初めに神は天地を創造された。地は混沌であつて、闇は深淵の面（おもて）にあり、神の霊が水の面（おもて）を動いていた（『旧約聖書』）。

「DO. 6890」の意味するものは何か。唐突な質問に読者は大いに困惑。心配無用である。東京大学総合資料館関係者以外で知る人はない。弥生研究の起点となった有名な「最初の弥生式土器」の資料番号である。一一八年の伝統ゆえ、東京大学は四〇〇万点も資料を所蔵する。幸い、これは、厳選された四八点中の一点として、展示公開中（『東アジアの形態世界』一九九四年）である。

この土器は、現高二二・〇センチ、胴部径二二・七センチ。やや扁平な胴部で平底。頸部が欠失するが、器種は「壺」。観察者・鮫島和夫によると、肩部に単節縄紋を回転させた羽状縄様と、三個六単位の円形浮紋がつく。胴部全体は飽磨き。頸部下には粘土紐、胴部の下位に接合痕がある。器形・紋様・調整等の特徴から、弥生後期の土器で、駿河湾東部からの移住者が製作した可能性が高いとみる。これこそが「弥生式土器」である。

東京大学

東京大学―この壺が発見された地点は「向ヶ岡（弥生町）貝塚」と呼ばれているがその正確な位置はよく分かっていない。（『東アジアの形態世界』一九九四年）

ある夜のこと。奈良大学文化財学科の卒業生・加藤某君から、興奮した声で電話がかかってきた。「先生、東京大学大学院博士課程に合格しました！」。「何？ 冗談やろ」。「本当です」。加藤君は、「弥生研究」を看板とするわが酒井ゼミの出身。なぜか「猿」の研究に打ち込む変わり者。合格と認定した東京大学の関係者は偉い。勇気もある。私に代わって彼は、このDO. 6890に限りなく接近した。この若者の将来はいかに。

恒例の話

有坂紹蔵―此日私はふと貝塚の表面に壺の口が貝のなかから出ておるのを見出し、これをなお抜き出して見ると、この壺ができました。（『日本考古学懐旧談』『人類学雑誌三八一五』一九二三年）

恒例の話をする。一八八四（明治一七）年三月二日は、学史上、「最初の弥生式土器」の発見日。既に一八七七（明治一〇）年、モースの大森貝塚発掘で日本考古学は開幕していた。発見者は有坂紹蔵。同伴者は坪井正五郎と白井光太郎。場所は東京都向ヶ岡貝塚。「学史上」と特記されるのは、有坂が前年、近くの新坂貝塚で同類を発見していたから。以前にも、福岡県三雲遺跡で甕棺から青銅鏡が出土した（青柳種信『怡土郡三雲村所古器図考』一八二二年）ような事例が各地であつた。

万年筆

一八八四年―ウォーターマンが万年筆の特許を取得（『科学年表―知の五〇〇〇年史』一九九三年）

この頃、ヨーロッパやアメリカでは、ダーウィンの『自然選択の方途による種の起源または生存闘争における有利な種類の保存について』（一八五九年）という長い題目の論文等によって「進化論」が流布していた。考古学の世界では、二六才の若きフリンダース・ペトリーが『ギザのピラミッドと神殿』（一八八三年）を刊行。欧州考古学は既に「確立期（一八八〇～一九三〇年）」に入っていた（角田文衛「考古学史」『世界考古学体系一六』一九六二年）。これらの出来事も、「最初の弥生式土器」の発見とはまだ無関係であった（ペトリーのことを熟知したい方は、安価な伝記（FLINDERS PETRIE a life in archaeology） Margaret S. Drower 1995）を参照されたし）。

便法

中谷治宇二郎―私は遺物の形式分類に際しては、一切用途による仮設を脱却すべきものと考えた。（「弥生式注口土器なる文をみて形式分類の立場を論ず」『史前学雑誌』一三二 一九二九年）

先程、DO. 6960を単に「壺」と紹介した。この表記法には問題がある。弥生土器の器種構成は「壺・甕・鉢・鉢・高坏・・」等と表記するのは、私のような異端派。むしろ「壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高坏形土器・・」等と謎の接尾辞を付ける方が正統派である。

例えば、「壺形土器」とは、その形状から一応は壺と仮定されるが、断定は保留されるもの。「壺形土器」の概念には、壺も、壺のようなものも、壺のようで壺でないものも含まれる。だがすべての土器に接尾辞を付けると文章が煩雑になり、出版社等から文句が出る（実際には、すべての土器に「形土器」をつけている頁の浪費家が多い）。そこで、文章には「壺・甕・鉢・鉢・高坏・・」と

簡略に表記し、わざわざ接尾辞省略を注記する丁寧派も多い。別に、「壺」と「壺形土器」等、両者を使い分けるテクニシャンもいる。

前提

中谷治宇二郎―我国遺物に対する一般概念は、その名称の連想に支配されている点が比較的多い（前掲）。

小林行雄―の形式から他の形式を分離することは容易ではない（「弥生式土器様式研究の前に」『考古学』四一八 一九九三年）

器種特定的前提には、貯蔵形態は「壺」、煮沸形態は「甕」、供饗形態は「高坏・鉢」等の理念を明示する作業が必要である（小林行雄「弥生式土器の様式構造」『考古学評論』一二二 一九三五年）。一般的には、煮沸用は煤が付き、貯蔵用は頸部がすばむ傾向が強い（小林正史「先史時代土器の器種分類について」『北陸考古学』二 一九八九年）。こうした一般的傾向から、ある程度は機能的分類が可能ではある。実際には、煤の付く壺や、煤が付かない甕、死体を収納する大甕（甕棺）、各器種の間形態、異形土器等、様々な点で判定不能の土器も多い。なお、中谷や小林の言う「形式」とは、いわゆる「器種」のこと。考古学における名称は、あくまで便宜的なものである。

熟考

小林青樹―これは果して壺とすべきか、それにしては少し口が広すぎる。それとも甕とすべきか。しかし、甕にしては口がすばまりすぎる。

〔甕壺・壺甕考〕「史学研究集録」一九九二年

この点で、東日本の研究者の悩みは特に大きい。北部九州に起源し、西日本各地に伝播した遠賀川式は、壺・甕・鉢・鉢・高坏等の定型品が多く、器種判定は容易である。だが東日本は、定型品以外に、限りなく「甕に近い壺」や「壺に近い甕」の出現が特徴。縄紋土器の伝統か、はたまた弥生土器との接触の影響か。この種の土器は近年、東日本への弥生文化の伝播の在り方を示すものとして大いに注目されている。

だが、研究以前に解決すべき問題が生じる。不明瞭な器種の呼び分けを、形態差で決めるか、機能差で決めるか。形態差とすれば、どこで区分するか。名称はどうするか。「形土器」は付けるか、否か。小林青樹は、熟考の結果、前者に「甕壺」、後者に「壺甕」の名称を与えた。佐藤由起男は、熟考の結果、「甕壺形土器」、「壺甕形土器」の名称を与えた（「土器の使われ方」『突帯文土器から条痕文土器へ』一九九三年）。

両者とも用語は単純だが、西日本の研究者は大いに困惑。否、彼らも負けてはいない。「深鉢変容壺」や「浅鉢変容壺」等、様々な哲学的用語を創作中である（藤尾慎一郎「水稻農耕と突帯紋土器」『日本における初期弥生文化の成立』一九九一年）。いずれも熟考した結果である。

ハムレット

杉原莊介「縄紋土器は深鉢形土器を基本形態として」、これに対し
て弥生式土器は甕形土器と壺形土器の両者からなる形態を組成を基本
とし……。〔弥生式土器〕「図説日本文化史体系一」一九六五年

弥生土器の「甕」と同形の縄紋土器を、なぜか「深鉢」と呼ぶのが原則。通例、縄紋土器に「甕」はなく、弥生土器に「深鉢」はない。そこで、縄紋時代と弥生時代の「境目の土器」の呼び方に困惑する者も出てくる。同じ土器でも、弥生土器と判断すれば甕（形土器）、縄紋土器と判断すれば深鉢（形土器）と呼ばねばならぬ。時代の接点は、竹に木を継ぐ状態。そこでハムレットの悩みが生じる。

こうした時、原則を無視するのが関西人の特徴である。大阪府立弥生文化博物館では、縄紋土器の深鉢や弥生土器の甕、その他、あらゆる時代の煮沸用土器を「土鍋」と総称することに決定した（「煮炊きの道具が語る調理の変化」『弥生人の食卓』一九九五年）。便利は便利だが、「土鍋」のイメージは、どう見ても深鉢や甕とは異なる。極楽トンボの関西人には哲学者やハムレットの悩みはない。しかるべき先学の心構えを紹介する。

沼田頼輔「何れの学問に於ても術語の命名は、極めて困難なるものにして、……、多少の不合理は存するにもせよ、従来慣用の文字を用いること、却りて便利なることを信ずるなり、然れども、是亦程度の問題にして、其の慣用せる学語にして、甚しき不合理を見出すに於ては、誰かこれを改良するに躊躇するもあらんや、（考古学上術語の命名法に就きて）『考古一五』一九〇〇年

図写

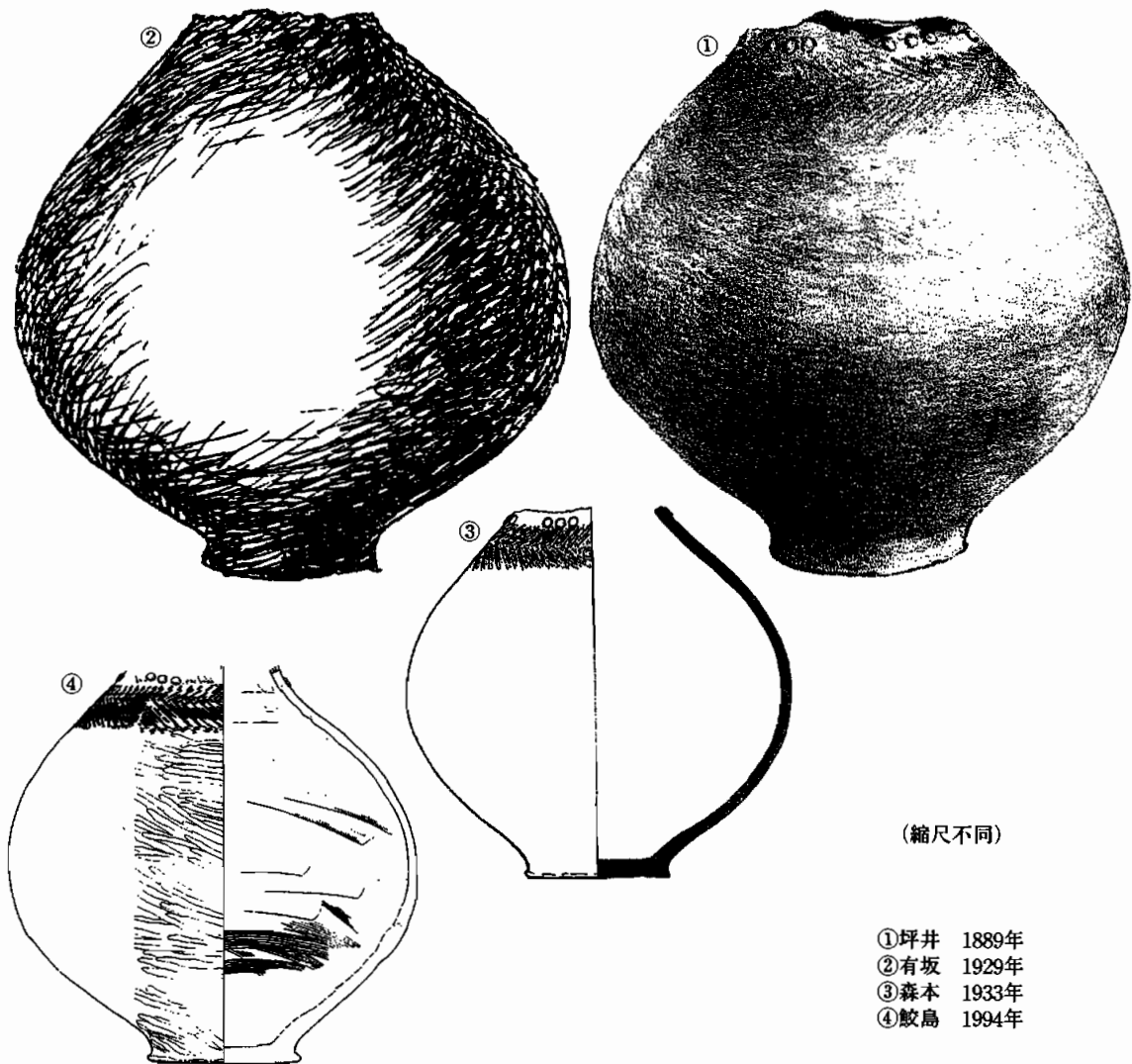
浜田耕作「されば考古学者は美術的絵画の能手たらずとするも、正確なる写生見取図（sketching）をなし、併せて製図法による図写を作るの素養を要す可し。（『通論考古学』一九二二年）

図面四枚を紹介する(第一図)。いずれもDO. 6990である。ただし、描かれた年代は異なり、最古と最新の図面では約一〇〇年の差がある。日本考古学では図面が特に重要視される。仮に図面が「いまいち」だと、それを掲載した論文まで「いまいち」の烙印が押される。その認識は関西考古学の祖「浜田耕作」に由来する。

①は、一八八九年に坪井正五郎が「帝国大学の隣地に貝塚の痕跡有り」(『東洋学芸雑誌六・九二』)に掲げたもの。陰影による克明なスケッチ。二分の一の注記がある。外面図。作者は不明。面白いことに図が左右逆。紋様部分を実物と比べると明らかである。さすがに坪井は気づいており、断り書きをしている。坪井は日本考古学の創始者で、「直径計」など土器計測の道具類の創作にも力をいれていた。

②は、一九二九年に発見者・有坂鋁蔵が懐古文(『史前学雑誌一・一二』)に載せたもの。坪井の図面とは四〇年の隔りがある。線描の粗いスケッチ。外面図。作者は不明。縮尺の明記はない。造兵学者の有坂は、大森貝塚で有名なモースに教えを受けて考古学の見識を深め、坪井らと共に活動をしていたが、考古学は門外漢と自認していた。

③は、一九三三年に森本六爾が「最初の弥生式土器」(『考古学四・一二』)に載せたもの。有坂の図面と同年代だが、図写に大差がある。右半が外面図、左半が断面図。目盛は約四分の一を示す。外面の紋様だけ表現され、両面の調整痕・粘土紐・接合部の描写はない。小林行雄が一九三〇(昭和五)年



第一図 DO. 6990

八月二十九日に作成したとの注記がある。土器実測に情熱を燃やした小林は、「クシ・マコ」(形どり器)を創作。これを武器に、より正確な図面の作成に努めた。今日、数万円もする高価な改良型マコが全国に普及している。

④は、一九九四年に東京大学総合資料館の展示図録(「東アジアの形態世界」)に収録された最新の図面である。左半が外面図、右半が内面図と断面図。目盛は十分の三を示す。作者は不明。解説は鮫島和大が担当。小林の図面から約六〇年後のもの。外面図に紋様と調整痕が、内面図に調整痕と粘土紐が、断面図に粘土紐や接合部が表現されるなど、今日的な図写の特徴を示している。

想い

佐原真一彼女(註 伝記作家のドロシイウエイマン)の判定のうち、図が、モールス直筆というのは誤りである。(佐原真「大森貝塚百年」一九七七年)

坪井正五郎一直径を計らんとする土器底を探り、其上に「直径計」を載せ、其周辺と此「直径計」の上に書き有る図との重なる所を見付け其図に付きたる寸法を読むなり。(「西ヶ原貝塚探求報告五」「東京人類学会雑誌九一九四」一八九二年)

三澤章一坪井博士の様な優秀な学者をさえ、単なる遺物の寸法取りに墜落せしめたものは何であった。(「日本考古学の発達と科学的精神」

「考古学研究六四」一九七〇年)

浜田耕作一図版は本文と同様、或は其れ以上の価値を有す。(「通論考

古学」一九二二年)

浜田耕作一図版印刷に稍々赤褐色を以てせるは、一見弥生式たるを知らしめん為にして、将来祝部土器は青藍色、縄紋土器は黒色を以て印刷せんことを期せり。(「弥生式土器形式分類図録」一九一九年)

後藤守一ー長さは米法を使う方がよい。(「日本考古学」一九二七年)

中谷治字二郎一実測図を作るには紙と鉛筆と物差し、三角定規でよい。(「校訂日本石器時代提要」一九二九年)

小林行雄一この手製の実測器を、晴れの舞台で使ったのは、昭和五年夏の上京の機会に、東京大学人類学教室に行つて、弥生土器の実測をした時である。(「考古学一路」一九八三年)

藤森栄一ーこれが、僕の武器です。多分建築の型どり道具の転用であろう。小林さんは、それで、弥生式土器の腹壁の細かいカーブをそのまま図面上に再現し、今まで考古学者の思いも及ばない完全な実測図を描いていた。マコの登場は、日本考古学の研究史上、最高の賞に値する技術的導入である。(「森本六爾伝」一九七三年)

森本六爾一今日聚成図当面の問題は、単に十二の資料を増加し得たか否かの論議よりも、其れが如何によく考へられた否かにある。(「日本考古学に於ける聚成図の問題」「考古学四一二」一九三三年)

エリス・エッチ・ミンズー日本弥生式土器の見事な聚成図を手にして以来僕は非常な喜びで精読しています。(『考古学一―一』一九四〇年)

有光教一一般的にもちいられる図式は、土器をその中心線をとおる縦の平面で切断した形でしめし、中心線の一方に器表をあらわし、他方に内面をあらわす。後者には、当然、器壁の断面ができて、その厚さがしめされる。(『土器』『世界考古学体系一六』一九六二年)

伊藤純一一九〇〇年、今日の土器の実測図で行われているような断面の表現が、伊東忠太の梵鐘の研究で現れる。(『土器の断面図』『考古学史研究三』一九九四年)

金関惣一実測図の一片を見れば、その人の考古学者としての力量を知りうるといふ判定の基準さえ一般化するようになった。(『世界の考古学と日本の考古学』『岩波講座 日本考古学二』一九八五年)

田中琢一この三枚をみる。ようやくわたし(註 梅原末治)もここま
でわかるようになった。むかしはよくわかっていなかったから、こんな図しか書けなかったのだ。(『梅原末治論』『弥生文化の研究一〇』一九八八年)

鈴木公雄一こうした作業(註 実測)は欧米の考古学においてはdrawingと呼ばれる人たちが担当し、考古学を専門とする人々は扱わない傾向にあるが、これは望ましくない。(『考古学入門』一九八八年)

佐原真一かつては、実測図(1/1大)を、手で縮図(1/3大)する際に、特徴的な部分をやや強調して表現し、これを製版(仕上がりが1/6大)した。しかし、現代では複写器で縮図するため、特徴は弱まった。(『弥生文化の研究一〇』一九八八年)

贈り物

坪井正五郎一石器時代の遺跡が沢山有る中で私が殊に向ヶ岡貝塚を撰んで記したのは帝国大学に接近した地に在り乍ら大学中の人にすら普く知られないからでございます。(『帝国大学の隣地に貝塚の痕跡有り』『東洋学芸雑誌九一』一八八九年)

話をD.O.S.S.に戻す。発見者・有坂は、同伴者・坪井に「一種異様な土器」を預け研究を委託した。坪井は五年後、同じ向ヶ岡貝塚の縄紋土器と区別せず、それを学界に報告した。坪井は一八八四年に人類学会を創設、一八八八年に東京大学大学院終了、翌年にイギリス留学、三年後に帰国、同大学理学部教授となり、一八九三年に人類学講座を開設した人である。この頃、主たる研究者は東京大学人類学教室関係者。活動の場は東京人類学会。発表の場は『東京人類学会雑誌』であった。日本考古学の創設者とは、この坪井正五郎のことを指す。学史家・斎藤忠は、「弥生時代の研究においては、ようやくその研究の緒を見た頃であり、坪井の研究には見るべきものがなかった」(『日本考古学史の展開』一九九〇年)と厳しい評価を下している。確かに坪井は「最初の弥生式土器」に愛着をもたず、縄紋土器と区別したわけでもない。人種民族論に奔走したのも事実である。だが報告文では、土器の形状・法量・器厚・色調・胎土・

調整・紋様・施紋道具等に言及し、土器観察の基本点は押さえている。縄紋土器に関する諸論文には、図面・分類表・組成表・集計表を豊富に使用し、近代的研究の萌芽は認められる（「西ヶ原貝塚探求報告」一八九三・四年）。

人類学者として出発した坪井は、そのことを強く意識していた。そこで「人類学会」とは別に、一八九五（明治二八）年に三宅米吉らと「考古学会」を設立した。不運にも、土器紋様等を微細に計測し過ぎた故に、「寸法測り」の陰口も生じた（八木装三郎「坪井博士の美点と欠点」『人類学雑誌二八一―二一九一二年』）。皆様は「直径計」をご存じだろう。方眼紙に幾重もの同心円を書いておき、土器の口縁部や底部のカーブを重ねて直径を復元する方法。今日、大いに普及している。坪井の「贈り物」である。

幻

有坂鉛蔵―初めての発見地名を取って名付ける事ならば新坂から出た

のがこれ以前の発見であるから新坂式とも云うべきであろうか。（『日

本考古学懐旧談』『人類学雑誌三八―五』一九二三年）

一種異様な土器は、やがて「弥生式土器」と呼ばれ始めた。ただし坪井の報文には「弥生町」の地名はなく、「弥生式土器」の提唱もない。出土場所も、あくまで「本郷向ヶ岡貝塚」となっている。一方、なぜか有坂は、発見当時はまだ「弥生町」の地名はなかったと言っている。この見解には特別の思惑があったらしく、懐古文に繰り返し強調している。だが、発見以前の「一八八三（明治一六）年に陸軍が作成した地形図には、確かに「向ヶ岡弥生町」の地名は存在する。事実、一八七二（明治五）年に「弥生町」の地名は生まれていた。とにかく有坂も坪井も、「弥生式土器」命名の意志はなかった。

実は、有坂は「弥生式土器」の名称に不服であった。彼は前年の一八八三年に、上野公園内新坂貝塚で同類を発見。密かに、それに「新坂式土器」の命名を考えていた。これが実現していたら、今日、「弥生時代」は「新坂時代」と呼ばれていたかも知れない。考古学の門外漢を自認する有坂が、その気持を世間に公言したのは一九二三（大正一二）年のこと。最初の発見から既に四〇年近く経過していた。その間に「弥生式土器」の名称が定着し、「新坂式土器」の名称は幻のまま消え去ったのである。

証言

蒔田鎗次郎―初めて弥生ヶ岡より発見せられたゆえに人類学教室諸氏が弥生式を名づけられたるもので、……。〔前掲『東京人類学雑誌一二二』一八九六年〕

野中完一―余等が命名した所謂弥生式なる名称は……。〔須藤氏の有紋素焼土器考に付て』『人類学雑誌一三二』一八九七年〕

大野雲外―其後二十六年頃西ヶ原農事試験所構内なる貝塚より発見せられし三箇の土器は正しく曩に弥生町貝塚より発見の土器と類似のものにて一種異様なれば之を呼ぶ名称に因却し教室に於て評議の結果町名を採って弥生式土器の仮名を下したる次第である。（『埴盆土器に就て』『東京人類学会雑誌一九二』一九〇二年）

註 二十六年とは一八九三（明治二六）年

有坂鉛蔵―そして其の出所が、向ヶ岡、即ち今の弥生町から出たので、

弥生式土器と命名されたのであります。(『史前学雑誌』の発刊を喜びにつけて過去五十年の思い出)『史前学雑誌』一〇一(一九二九年)

八木契三郎「此土器へ弥生式と云へる固有名詞を冠せし理由は前期の如く其初て発見せられたる土地の名に因みしまでにて別に他意あるにあらず、己に斯る一時の仮称に過ぎざるが上に適當の佳名にもあらずれば此物の確定すると同時に名実叶う称呼に改む可き必要有り。(『日本考古学』改訂版)一九一三年)

「弥生式土器」の命名者は誰か。関係各位の証言では個人名は特定できないが、一八九三年頃には、東京大学人類学教室員が「仮称」として使い始めたことは確かである。それ故、「所謂弥生式土器」と表記されることが多い。坪井の弟子・八木契三郎は、一九一三(大正二)年になつても、適切な名称に変更すべしと強調している。

夢半ば

蒔田鎗次郎「猶ほ弥生式土器の模様及古墳及石器時代等の關係に就ても少し述べたい事も有るが道灌山の調査も未だ半ばなれば進んで総括して報告する事と致さふ。(『弥生式土器と共に具を発見せし事に就て』

『東京人類学会雑誌』一九二〇年)

周知のように、「弥生式土器」の用語を使って最初に論文を発表したのは、有坂でも坪井でもなく、第三者の蒔田鎗次郎であった。蒔田は、一八九六年三月、東京都巢鴨の自宅塵捨場で露出する竪穴から類似の土器を発見。「弥生式土

器(貝塚土器ニ似テ薄手ノモノ)発見ニ付イテ」(『東京人類学会雑誌』二二二(一八九六年))と題して発表した。「弥生式土器」の用語は東大人類学教室員に由来するが、蒔田はそれ以降も執念で研究を進め、次々と弥生式土器に関する優れた論文を書き、また一九〇四(明治三七)年三月一九日に「弥生式土器研究会」を発足させた。初会合の出席者は四名。十数個の弥生式土器を机上に並べ、活発な討議が行われたという(『雑報』『東京人類学会雑誌』二一八(一九〇四年))。今日、「弥生式土器研究の創始者」は蒔田とされる所以である(岡本勇「弥生文化研究と蒔田鎗次郎」『論集』日本原史一九八五年)。

岩崎卓也によれば、自ら「弥生庵」と称した蒔田は、一九〇五(明治三八)年、結婚と同時に学界活動を急止した(『蒔田鎗次郎論』『弥生文化の研究』一九八八年)。一〇年間の短い活動ではあったが、彼は弥生研究史に確たる足跡を残した。道灌山遺跡の報文で彼が示した弥生式土器の美しい図は、実に印象的である。上の文章を読む時、その急止は、蒔田の夢半ばのことだったと想起される。

人面土器

小林與三郎・沼田頼輔「発掘品の中極めて珍しきは土器の頸部に人面を有せるものなるべきか(『下野国河内郡野澤村発見の土器に就て』『東京人類学会雑誌』一六六(一九〇〇年))

同じ頃の話。一九〇〇(明治三三)年、大きな凶面を掲げた割りには小さな報告がなされた。朝鮮国釜山の郵便局への転勤が決まった小林與三郎は、収蔵の人面付土器を、東京大学人類学教室へ委託した。この土器は、一八九四(明治二七)年に、栃木県野澤遺跡で発掘したもの。人類学会会長・坪井は、沼田

に報文執筆を要請した。沼田は、これを貝塚式（縄紋土器）に属するものとみて報告した。

それから六四年後、杉原莊介・大塚初重は、かかる人面付土器や関係土器を弥生中期の「納骨器」と認定。一個々数が縦穴に埋納されたことを確認。そうした墓制を「再葬墓」と呼ぶことになる（千葉県天神前遺跡における弥生時代中期の墓址）『日本考古学協会第三〇回総会研究発表要旨』一九六四年。

以降、再葬墓に関する数々の調査・研究も積み重ねられ、東日本の弥生文化を象徴する墓制であることも判明。今日、石川日出志（「人面付土器」『季刊考古学一九』一九八七年・「再葬墓」『弥生文化の研究八』一九八七年）や設楽博己（「壺棺再葬墓の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告五〇』一九九三年・「壺棺再葬墓の起源と展開」『考古学雑誌七九・四』一九九四年）等、関東の研究者達が精力的に新たな研究を試みつつある。

紆余曲折

大野雲外「弥生式」という名は前にも記した通り弥生町発見のものが基になっているのですが、だんだん範囲が広がって来まして、ついには弥生町発見のものとは似ないものまで含むようになってきましたから、その混乱を防ぐため・・・（埴谷土器に就いて）『人類学雑誌一九二号』一九〇二年

「弥生式土器」という用語の定着に紆余曲折があった。一個の土器から出発。各地で類例が増加するにつれ、混乱が発生したのは当然のこと。当時の実情は、大野の言葉が明示する。「弥生式土器」命名の前後には、「有紋土器」（須藤求馬）・「埴谷土器」（大野雲外）・「馬來式土器・中間土器」（八木柴三郎）・

「Intermediate pottery（中間土器）」（マンロー）・「忠臣蔵」（東京大学人類学教室）等の用語が生み出され、熱気ある議論が起こった。発見から約三〇年。大正時代に入って、ようやく「弥生式土器」の名称が定着した。否。命名から一〇〇年後の近年、更に紆余曲折が生じつつある。

力説

編集子（註 杉原莊介）「縄文式土器文化・弥生式土器文化の略称は、編集方針に従って縄文文化・弥生文化とした。これについては、その式は型式の略であり、土器型式には当然付けられるべきであろうが、省略の際に式を残して文化に付するのはおかしいので、土器を省くなら式も同時にすべきという考えからなのである。（『日本考古学講座四』一九五五年）

佐原真「この際、「式」を一切省いて、「縄紋、弥生土器」、「縄紋、弥生時代」、「縄紋、弥生文化」、「縄紋、弥生人」の語を使用することにしたと思う。（農業の開始と階級社会の形成）『岩波講座 日本歴史一』一九七五年）

佐原真「「弥生式土器」という学史的に記念すべき名称を、いま「弥生土器」とあらためても八十数年前の命名者たちの意思にそむくことにはなるまい、と判断したのである。（『弥生土器Ⅰ』一九八三年）

賢明なる読者はお気付きだろう。本書に、「弥生式土器」と「弥生土器」の用語が混在する。なぜか、一九七五年佐原真は「弥生式土器」を「弥生土器」

に変更すべきだと力説。由緒ある用語に重大な危機を与えた。「弥生土器」の用語は、一九七二年に桜井清彦が「縄紋土器」に合わせ使い始めたという。佐原の力説以来、寺沢薫・森岡秀人「弥生土器の様式と編年」（一九八九年）等、様々な本の表題や文章中にも普及しつつある。

ただし、新旧の用語が一举に取って代わることはない。考古学史の権威・斎藤忠（『日本考古学史辞典』一九八四年）や京都・木曜クラブ『考古学史研究一〇三』（一九九二〜一九九三年）など、「弥生式土器」の愛好者も根強い。弥生研究の原点・東京大学の研究者はどうか。最初の弥生式土器D.O. 6990の展示解説（鮫島和大「東アジアの形態世界」一九九四年）をチェックしてみよう。面白いことに、同一文中に両用語が混在している。明らかに過渡的現象である。

鮫島和大「日本各地の弥生式土器の編年を試みた『弥生式土器聚成図録』が小林行雄らによって刊行されたが、ここで再び「弥生町の壺」が注目された。つまり、南関東地方の弥生土器は四つの様式に分けられたが、・・・」（『東アジアの形態世界』一九九四年）

（註 下線筆者）

事件

佐藤達夫「ところが不思議なことに、この有名な貝塚の位置が、もともとよくわからないのである。（「向ヶ岡貝塚はどこか」「向ヶ岡貝塚」一九七九年）

一九七四年の春、東京大学で事件発生。遠きアフリカでヨハンソン達が生きた三〇万年以上の初期人類ルルシーを発見した事件とは比べようもなかったが。

地元、根津小学校の松任・武田・長谷川君が、大学構内の倒木根元で弥生土器を発見した。世間では通例、この程度のことを事件と呼ぶことはない。だが、東京大学にとっては大事件。やがて、そこに工学部高密度エネルギー実験棟の建設計画が浮上。ことの重大さに驚き、関係者は当局と協議。佐藤達夫らは早速、一九七五年二月から発掘を実施した（佐藤達夫他「向ヶ岡貝塚」一九七九年）。場所は東京都文京区弥生二丁目一六号。舌状台地の縁辺で、東側は一〇メートルの崖。眼下に根津の街があり、かつて不忍池も見えたという。重大さとは、そこが「最初の弥生土器」発見地の可能性強かったこと。

不思議なことに、発見地は不明となっていた。発見者・有坂も、懐古文を発表した一九二三年頃には、場所確定できない状態であった。一九四〇年、「弥生町遺跡が既に殲滅していることは周知のこと」（杉原莊介「武蔵前野町遺跡調査概報」『考古学二一一』）という有様。弥生研究の原点・東京大学が今日、弥生研究から脱落した所以である。

向ヶ岡貝塚は九〇年ぶりに世間に再登場した。発掘では、弥生後期の大溝や貝塚や多数の土器などが出土。だが、発掘場所は、由緒ある「向ヶ岡貝塚」でなく、新たに「弥生二丁目遺跡」と命名された。理由は、「最初の弥生土器」発見地と今回の発掘場所との因果関係が未確認とのこと。佐藤は、かつて坪井が描いた周辺地形のスケッチも考慮し、そこを「最初の弥生土器」発見地と断定した。

何事にも異論が発生するのが世の常。弥生町の住人・太田博太郎（「弥生町貝塚の位置」『論争・学説 日本』一九八六年）や佐藤の弟子・今村啓爾（『東京都弥生町向ヶ岡貝塚』『探訪 弥生の遺跡』一九八九年）等、なぜか東京大学の関係者にも反対する声が多い。

危機

笹森紀己子―これらのことから弥生町遺跡出土の壺形土器は、弥生町式でなく、前の町式以降に位置付けられるものだと考える。(久ヶ原式から弥生町式へ)「土曜考古九」一九八四年)

佐原真一この土器を弥生時代に属すると認めるか、むしろ、古墳時代に属すると考えるかは、いま、新しい課題である。(弥生文化の研究 一〇)一九八八年)

近年、DOGSに危機が迫った。「最初の弥生式土器」たる土器が、実は弥生土器でないという。「弥生町式」の標識たるこの土器が、何と弥生町式でないともいう。考古学には不思議なことが多い。「弥生式土器」なる概念は、この土器一個を標識に設定されたはず。「弥生町式」の型式名も、この土器一個を標識に設定されたはず(杉原庄介「武蔵弥生町出土の弥生式土器について」『考古学』一一七―一九四〇年)(註 南関東の弥生後期は、初頭Ⅱ久ヶ原式、中頃Ⅱ弥生町式、末Ⅱ前の町式と細区分されている)。

従来の弥生時代後期を前半期・後半期に二分し、「後半期」を新たに古墳時代に組み込もうとする見解がある。この見解だと、後期中頃は、弥生時代と古墳時代の境目上に位置することになる。笹森紀己子は、弥生町式の特徴は「羽状縄文帯をS字状結節で区画する文様構成」だが、この土器はそれに該当せず、前の町式以降に下るといふ。岡本孝之は、これを古墳時代の土器と明言する。となると、それは古墳時代の「弥生式土器」か、あるいは「土師器」となり、弥生土器の身分から転落する。従って、記念すべき「最初の弥生式土器」を保管する東京大学も、「弥生土器」の表題の下、それを紹介する私も、共に危機を

迎えることになる。

延命策

菊池義次―既成の弥生町式期なる概念を考古学史的な意義を重視し、尊重する意味からも、・・・温存するための延命策として取り挙げたものであった。(久ヶ原・弥生町式・円乗院式土器)「弥生文化の研究四」一九八七年)

配慮深き考古学者もいる。今日、弥生時代は、「早期・前期・中期・後期・末期」の五区分(Aモデル)が基本である。そう断定すると抗議が起こる。実際には、研究者個々で見解は多様である。「前期・中期・後期」と三区分する見解(Bモデル)、「早期・前期・中期・後期」と四区分し「末期」を設けない見解(Cモデル)、「前期・中期・後期・末期」と四区分し「早期」を設けない見解(Dモデル)が存在する。

「最初の弥生式土器」が弥生後期から脱落しても、弥生末期を設けておくと、弥生土器の権利をまだ保持できる。末期から転落すると絶体絶命。弥生土器の権威・佐原真の見解はどうか。DOGSを弥生後期に位置付け、「紀元三世紀」の年代を与えている(「人間の美術」一九九〇年)。

境目論一

石野博信―古墳の発生を考える時には、ことによると弥生・古墳という時代区分を外して考えた方がいいかわかりませぬ。(古墳の発生)『東アジアの古代文化』二七 一九八一年)

近藤義郎「古墳時代とは前方後円墳の成立をもって始まると私が述べた意見に立脚するかぎり、残念ながら区分は解消できないのでありまして、……

三世紀は「邪馬台国の時代」。畿内では「庄内式土器の時代」（田中琢「布留式以前」『考古学研究二二二』一九六五年）でもある。

三世紀は弥生時代か否か。最古の本格的な前方後円墳は奈良県・箸墓古墳。権威・都出比呂志は、古墳時代の開始を西暦三〇〇年±二〇年とみる（『前期古墳の新古と年代論』『考古学雑誌六七―四』一九八二年）。識者・白石太一郎は、三世紀後半は古墳時代とみる（『古墳はなぜつくられたのか』一九九五年）。白石案では、理論上、三世紀前半には弥生土器、後半には土師器が存在することになる。箸墓には、「庄内式」でなく「布留式」を伴う。「庄内式は、弥生土器か土師器か？」の質問には、「土師器」と答える研究者が多い。「弥生土器」と明言する研究者はいない。

境目論二

乙益重隆「たとえ葉畑遺跡において山ノ寺式の後半段階に稲作農業の遺構や遺物が検出されたとしても、この種の土器を弥生土器と決めるに著しい抵抗がある。』（総説）『論争・学説 日本の考古学四』一九八六年）

佐原真一「それならばおたずねしたい。刻目突帯紋土器、山ノ寺式が縄紋土器で板付工式が弥生土器と識別する基準は何か、どう違うのか。

（はじめに）『弥生文化の研究四』一九八七年）

北部九州の山ノ寺式や夜白式は、縄紋時代と弥生時代の境目の土器。「山ノ寺式や夜白式は、縄紋土器か弥生土器か？」と質問すると、「縄紋土器」と答える研究者が半数。「弥生土器」と答える者も半数。最近、「弥生土器」と答える者が急増中である。山ノ寺式や夜白式の「深鉢（甕）形土器」を見せると、「縄紋土器」と答える者が多数を占める。山ノ寺式や夜白式の「丹塗磨研壺（形土器）」を見せると、「弥生土器」と答える者が多数を占める。共伴する甕と壺を見て、前者を「縄紋土器」、後者を「弥生土器」と答える二面的性格者が多い。「ん？」と黙り込んでしまふ決断力のない考古学者もいる。

山ノ寺式や夜白式の丹塗磨研壺を見て、「縄紋土器」と胸を張って答えるには大いに勇気がいる。同時に、共伴する深鉢（甕）を見て「弥生土器」と明言するには少し勇気がいる。山ノ寺式や夜白式の丹塗磨研壺は、明らかに弥生土器であって、決して縄紋土器ではない。丹塗磨研壺を「縄紋土器」と明言する縄紋研究者はいるのか。共伴する条痕紋深鉢（甕）を「弥生土器」と明言する弥生研究者はいるのか。

断念

佐原真一「私は縄紋土器と弥生土器を土器自体で区別することを断念した。』（『弥生土器Ⅰ』一九八三年）

何事でもそうだが、研究の展開には、従来の固定観念を破壊し、伝統的な認識から決別することも必要である。考古学における土器の重要な役割は、時代区分の指標や時間の目盛となること。それなのである。佐原の英断は、新たな展開への提言となる。

私の名字は「酒井〓さかい」。「境目研究」に最適である。「境目の考古学」を提唱する義務を負う。血液はB型。関係の有無は不明だが、典型的な二面的性格をもつ。各時代の境目論議の新たな展開を目標に、従来の時代区分を用いることを断念した。

J-YとY-K

私は、縄紋時代と弥生時代の境目に「J-Y変成期」、弥生時代と古墳時代の境目に「Y-K変成期」というフアジーな時代を設定（変な用語である）した。そして、各変成期における二面性を追求し始めた。つまり、「J-Y変成期」における縄紋性と弥生性、また「Y-K変成期」における弥生性と古墳性の追求である。この立場では、「J-Y変成期」に縄紋土器と弥生土器、「Y-K変成期」に弥生土器と土師器が共存する可能性も認める。縄文土器と弥生土器の共存。弥生土器と土師器の共存。非常識な見解である。

「J-Y変成期」は、縄紋研究者にとって「縄紋社会の解体過程」である。同時に、弥生研究者には「弥生社会の生成過程」である。一方、「Y-K変成期」は、弥生研究者にとって「弥生社会の解体過程」であると同時に、古墳研究者には「古墳社会の生成過程」である。時代の境目は、前後、どちらの研究者の私物でもない。

時運至らず。かかる異端の認識は世間で抵抗がある。否、遠く山梨県で、こうした認識を参考にして下さる心優しき研究者もいる（中山誠二「甲斐弥生土器編年の現状と課題―時間軸の設定」『研究紀要九』一九九三年）。幸せなことである。

時運

八木契三郎―従来は弥生式土器と称するもの未だ世人の注意を喚起するに至らず、又多くの材料を得ざりしが近時に通んで、其遺跡と新事実との報道頻りに漸く学術社会に重きを加うる時運に達せり、...

〔改版の辞〕『日本考古学 改訂版』一九一三年

年号が「明治」から「大正」へ改まったのは一九一二年。イギリスではドーソンがピルトグウン人骨を発見したが、弥生研究とは無関係の出来事であった。この頃には各地で類例も増加し、弥生土器は無視できない存在になった。一九〇八（明治四一）年には、鍵谷徳三郎が愛知県高倉貝塚で、弥生土器と磨製石器の共存を確認（「尾張熱田高倉貝塚実査」『東京人類学会雑誌二六六』一八八六年）する等、次第に弥生土器と他の遺物との共存関係も浮かび上がってきた。かかる時運の中、弥生研究で最初の転機となる出来事が生じた。

一九一三（大正二）年のこと。向ヶ岡貝塚の坪井正五郎が、ロシアのセントペテルスブルグ（レニングラード）で客死。弥生研究の幕開け期終了を象徴する出来事となった。坪井が、当地から東京大学人類学教室に宛てた最後の絵葉書（斎藤忠氏の宝物「研究史」『図説 日本文化史体系一』一九六五年）に、当地の名物〓大鐘の写真と「弥生式土器」や「銅鐸」の肉筆が残っているのは興味深い。私は数年前、激動中のレニングラード・大鐘前で、この絵葉書を想起した経験がある。

一九一三年、「弥生土器を語らずして考古学はなし」の時運を察知した坪井の弟子・八木契三郎は、「弥生式土器と堅穴」と題する論考を執筆・追加して『日本考古学 改訂版』（一九一四年）を刊行した。八木の重厚な「改版の辞」

は、当時の実情を見事に言い表わしている。旧版「日本考古学 上・下」(一九八八・一九九九年)は、わが国最初の体系的な考古学の概説書として大好評。だが、弥生土器等の記述はなかった。無関係の話だが、私は、八木が幼年期を過ごした丹波篠山が故郷である。

旅立ち

坪井が死去した同一九一三年、わが関西から、しかるべき気鋭の考古学者がヨーロッパを目指し旅立った。その旅立は「我国考古学界の慶事といふべきなり」(『考古学雑誌三一七』一九一三年)と評されたという。やがて彼は坪井に代わり日本考古学の牽引になる。この話は後にして、目を九州へ転じておく。

赴任

中山平次郎―此名を向ヶ岡弥生町発見の土器の一類に限りたといふ論が学者間にあると承る。此狭義の弥生式の方からいふと、余の発見したものも弥生式とは称し難いのである」(『所謂弥生式土器に対する私見』『考古学雑誌八一二』一九一七年)

その頃、一人の中年の病理学者が九州大学に赴任した。彼は、弥生町向ヶ岡貝塚のある東京大学の出身であった。赴任当初は、古代山城に関心をもち近隣の山野を跋渉。やがて弥生土器に関心をもち始め、結果的には弥生研究に大きな足跡を残すことになる。九州赴任が決まった時、かの坪井正五郎が「弥生式土器の本場に行くね」と声をかけたという(岡崎敬編「日本考古学選集一一」一九八五年)。実際には、「北部九州」弥生土器の本場の認識は、彼の情熱的

な活動の結果として生まれたと見た方が良い。

一九一七(大正六)年、福岡県板付田端出土の銅銚・銅剣を友人から見せられ、彼は現地に急行、散乱する土器片に遭遇した。鏑の付着痕は青銅器の共伴を示唆していた。これらの土器は、関東の弥生土器とは様相が異なることも実感した(『銅銚・銅剣の新資料』『考古学雑誌七一七』一九一七年)。土器片は、今でいう金海式甕棺等。これが発端となり、彼は博多湾沿岸の糸島・早良・筑紫・粕屋を精力的に踏査し始めた。各遺跡で採集した土器には、刻目紋や篋描き沈線紋、突帯や鐔状部分も含まれていた。縄紋が施された弥生土器はなかった。結果は次々と「九州北部に於ける先史原史両時代中間遺物に就て」(『考古学雑誌七一〇』八一三)一九一七年)で報告。結論的には、二種の「中山モデル」として重要な認識を提示した。いずれも、学史上、弥生土器に関する最初の総合的見解となった。彼とは中山平次郎博士。当時、博士には日の出の勢いがあった。

中山モデル

中山平次郎―両時代の何れとも著しく相違したる時代が此中間に存せりといふには非ずして、或は石器時代後期といふべく或は古墳時代前期とも見做すべき一の移行時代を指示するに他ならず。(九州北部に於ける先史原史両時代中間期の遺物に就て 一)『考古学雑誌七一〇』一九一七年)

中山平次郎―此廻轉の中心に朝鮮があつて弥生式の枝が此処から東と南とに分れて居て貝塚土器の方は謂はば余つた端と端とに隔つて居るやうに見ゆるのである。(『所謂弥生式土器に対する私見』『考古学雑誌

違和感

中山・時間モデルは、先史（縄紋）時代後半と原史（古墳）時代前半の移行過程に、弥生土器・石器・金属器が併用される「中間時代」を設定。第一期＝先史時代、第二期＝中間時代、第三期＝原史時代という区分を明記したものだし、「中間時代」を先史時代と原史時代の移行過程の中に組み込んだ為、かなり不十分さが残った。後日、学史を概観した小林行雄は、「中山説は弥生式土器のために独立した時代をあたえようと要求するものではなかった」（論集

日本文化の起源一）一九七一年」と批判。確かに、「中間時代」を明確に独立させるべきであった。中山・空間モデルは、「中間時代」に、弥生土器は九州北半と本州西半に分布、縄紋土器は九州南半と本州東半に分布することを図示したものである。つまり、弥生土器世界と縄紋土器世界が共存する見解を提示した。弥生土器は縄文土器より後出する見解が主流の今日、このモデルが言及されることは少ない。

酒井モデルでは、弥生世界全体は、「弥生的弥生世界（西日本）＋フロンティア世界（中部・北陸）＋縄紋的弥生世界（東日本）＋正面的外界（朝鮮半島・中国大陸）＋裏面的外界（沖縄世界）」で構成される。私のように弥生的弥生世界から見た弥生論（A）を展開することも可能だが、別途、フロンティアから東西両世界を見た弥生論（B）、縄紋的世界から見た弥生論（C）、正面的外界＝朝鮮半島（D1）・中国大陸（D2）から見た弥生論、裏面的外界＝沖縄世界（E）から見た弥生論等も不可欠である。また同じ弥生世界と言えども、弥生文化発祥の地＝北部九州（A1）とは中国（A2）・四国（A3）を介在させた関西（A4）に私体験を持つ筆者は、関西から見た弥生世界を構築する義務を負う。各世界在住の弥生研究者の御健闘を祈りたい。

中山平次郎―此名を向ヶ岡弥生町発見の土器の分類に限りたといふ論が学者間にあると承る。此狭義の弥生式の方からいふと、余の蒐集したものも弥生式とは称し難いのである。（所謂弥生式土器に対する私見）『考古学雑誌八一二（一九一七年）』

関東の縄紋が施された弥生土器に接していた中山の眼には、当初、本場・北部九州の弥生土器はどのように写ったのか。逆説的に推測すれば、当初、それを弥生土器でないと感じたに違いない。当然のこと。だが、当地の実情や大野雲外の見解などを踏まえて思い直し、関東の弥生土器を「狭義の弥生土器」、北部九州の弥生土器を「広義の弥生土器」等と認識するに至った。今日的観点では、そこから展開する中山の人種論・土器論・時代論・文化論等、多くに問題を内包するが、関東と北部九州、両地方の弥生土器に対する違和感こそ、弥生土器研究推進のエネルギーとして作用したのは事実である。

大甕

中山平次郎―此大甕を見るに、其土質広義弥生式土器と全然同等にして、其形状も亦一致したるものありて、其粧飾の如きも亦同等と称すべきものあり。要するに大甕と弥生式の甕との相違は唯器物の大小に過ぎざるに由り、……。〔大甕を発見せる古代遺蹟〕『考古学雑誌一〇一―一九二〇年〕

北部九州の弥生土器で特に注目されるのは、大型の甕棺である。高さ一メートルを超えるような大型甕棺を広義の弥生土器と認定した中山は、福岡県御床松原遺跡等、総数五一カ所の甕棺出土遺跡を調査。『考古学雑誌二一一・二一四』（一九二〇年）に三回に分けて報告した。それは、地名・文献・報告者・発見状況・伴出遺物・副葬品・出土状況・朱の有無・立地・年代等、多岐に及び、情報収集の模範演技たる仕事であった。結果を総合し、甕棺墓に関する様々な基本的認識を導き出した。弥生研究史上、最初の本格的な甕棺研究として評価できる。弥生土器の本場ならではの研究となった。今日、大型甕棺は、北部九州社会を象徴するオブジェとしての存在になった。

藤尾慎一郎によれば、一九八九年時点で、発見された甕棺数は一三六九二基を数えるという（『九州の甕棺』『国立歴史民俗博物館研究報告二一』一九八九年）。その後も、佐賀県吉野ヶ里遺跡で三〇〇〇基とも言われる新発見もあり、今日、総数は二〇〇〇基を大きく越えている。今日、型式編年学的研究は橋口達也（『甕棺の編年的研究』『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XX XI』一九七九年、「大形棺成立以前の甕棺の編年』『研究論集一七』一九九二年）や中園聡（『甕棺型式の再検討』『九州考古学六六』一九九一年）、甕棺成立過程研究は坂本嘉弘（『埋甕から甕棺へ』『古文化論叢三三二』一九九四年）、甕棺製作技術研究は井上裕弘（『甕棺製作技術と工人集団』『論集日本原史』一九八五年）、甕棺一般論は三野和雄（『甕棺と甕棺墓』『武蔵野の考古学』一九九二年）等の優れた研究が積み重ねられている。

近年、私は「隣ムラの考古学」を提唱中である。福岡県の須玖岡本遺跡は甕棺王国の中心地として知られている。無数の甕棺墓と三〇面もの中国鏡を副葬する王墓の存在が、そうしたことの証である。では、須玖岡本の隣ムラには、甕棺があるか。ある。その隣ムラには甕棺があるか。確かに存在する。その隣ムラはどうか。これまた、甕棺墓が営まれている。その隣ムラは……。

のムラには甕棺がない。確かに甕棺がない。そのムラから外は、北部九州＝甕棺世界の外界である。

西日本と東日本

中村倉司「田舎の弥生土器しか見たことのない私は、「これが弥生土器ですか」と器形と文様の調和した流麗な土器を見て感嘆してしまいました。氏は「関東のあれは弥生土器ではない」と冗談まじりにおっしゃいました。（『甕形土器から見た弥生社会の地域差』『土曜考古一五』一九九〇年）

佐原真一いや、ショックやったんは、京大の屋根裏へ連れていって、唐古の土器見せたのね、これが弥生土器ですかって言うのはいいですけどね、これで弥生土器ですかって言うの。オイ、コラって、僕はオイコラって絶対言わん。仙台から来た者がこれで弥生ですかって言うから、これが弥生じゃ言うて怒った。（『奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター二〇年史』一九九五年）

弥生土器と言えども、東日本と西日本では大いに異なる。関東人・中村倉司や東北人・某氏が、関西の弥生土器を見た時のエピソードは実に面白い。だが、関東の弥生土器が「弥生土器でない」とは極めて失礼な話である。心配無用。関西を代表する唐古の弥生土器も、北部九州人の眼では所詮「田舎の弥生土器」である。本場の弥生土器（山ノ寺式・夜臼式の壺、須玖式土器、祭祀用土器、巨大甕棺等）と比べれば歴然とする。もちろん関東の弥生土器は、関西以上の田舎の弥生土器。東日本を象徴する再葬墓等の土器類は、いかにも縄紋風。東

北の弥生土器は、関西人の私には典型的な縄紋土器に見える。すべて、「田舎度」の差である。ただし、各自の田舎度に誇りを持つべきである。

中村さんに一言。関東人・中村が関西・唐古の弥生土器に使った「流麗」なる用語は、関西人・Aは、東北の亀ヶ岡式土器に使い（大阪府立弥生博物館「みちのく弥生文化」一九九三年）、関西人・Bは、北部九州の須玖式土器に使っている（工楽善通「古代史復元五」一九八九年）。次元の異なる土器は、誰でも「流麗」に感じるらしい。北部九州の晩期縄紋人には、朝鮮半島の丹塗磨研壺が「流麗」に見えたに違いない。とにかく中村が、関西で経験した屈辱をバネに、優れた論文を完成したことは喜ばしい。

大森人

小林達夫「縄紋土器がこの物語性文様をもつことこそ、縄紋土器の最も注目すべき特色の一つであり、たとえば弥生土器との性格の差をはつきり示すのである。（『縄紋土器の研究』一九九四年）

岡本孝之「弥生文化の研究も、九州派と関西派の間で確執がある。関西派ががんばれば、がんばるほど弥生文化そのものの理解に混乱が大きくなるように、大森（縄紋）文化の側からは見える。関西派による東日本弥生文化の理解は悪い。（杉原莊介と山内清男の相克）『神奈川考古二七』一九九一年）

まことに同感である。関西人が縄紋的世界を理解できるはずがない。ところで、弥生土器の本質は無紋である。このことは「最古の弥生壺」が象徴する。流麗なる縄紋土器の世界に突如、朝鮮半島直伝のシンプルな弥生壺が出現。こ

の壺こそ、弥生土器の真の姿であった。弥生土器は無紋が命。縄紋土器の権威・小林達雄は、縄紋土器の紋様を「物語」と評価する。それを「神話」と言い換えても良いだろう。物語なき縄紋土器は存在せず、物語ある弥生土器はない。弥生土器の紋様は、潜在的な縄紋性に根源するが、最早、そこに物語性はない。大阪府立弥生博物館の小山田宏一は、亀ヶ岡式土器に「小宇宙を律した神話体系」を読み取るという（『みちのく弥生文化』一九九三年）。それは錯覚である。大森人・岡本孝之がその言葉を聞けば激怒しよう。関西の弥生人ごときに縄紋神話が理解できるはずがない。まことに同感である。それにしても、千葉県荒海貝塚の大森人・鈴木正博は弥生的弥生世界を実によく勉強している（『荒海貝塚の原風景』「古代九五」一九九三年）。

旅立ち

コットレルー彼の名はウィリアム・マシュー・フリンダーズ・ペトリといい、当時考古学の世界では全く無名の人であったが、彼は最も偉大な考古学者の一人となる運命にあった。（矢島文雄訳『ピラミッドの秘密』一九五七年）

一九一三（大正二）年、京都大学助教授の浜田耕作は、大きな期待を背負ってイギリスに旅立った。三二才。エジプト学者・ペトリは六〇才。既に「近代考古学の父」たる存在であった。浜田は、ペトリの型式編年学を学び、モンテリウスの存在を知り、エジプトの調査に参加。等々。一九一六年に帰国。同年、京都大学に考古学講座を開設。これが契機で、弥生研究の主体が東京大学から京都大学に移行した。ペトリ同様、浜田も偉大なる考古学者の道を歩み始めた。一九一六年から彼が死去する一九二九年まで一三年間は、弥生研究は

京都大学の時代であった。否、九州大学の中山平次郎も健在であった。

浜田は、ペトリーやモンテリウスによるヨーロッパ考古学を手本に、資料集成・目録・等級・観察・分類・型式・様式・共存関係・一括物・組列・痕跡器官・組成・型式群・時間区分・層位・変化・年代・編年・類推・検証・図写・図版・報告など、型式編年学を構成する全要素に着目し、科学的な考古学を進める必要性を強調した。ついては、原書翻訳「モンテリウス 考古学研究法」(一九三二年)・解説書刊行(『通論考古学』一九三二年)・講義(『考古学』一九三二年)・「史林三一―四一」(一九一八―一九一九年)・遺跡発掘と報告書刊行(『京都帝国大学文学部研究報告二・四・六』一九一八・一九二〇・一九二二年)など、様々な模範演技によって啓蒙したのが特徴。そして、「集成・分類・編年」のスローガンが、次第に関西の研究者に刷り込まれ始めた。

浜田に一言だけ注文がある。型式学的研究は、弥生土器でなく、やはり縄紋土器を対象とすべきである。弥生土器は、縄紋土器に比べて無紋性が強く、形状変異も少ない。つまり、型式学的研究にはあまり向いていない。こうした点で、弥生土器研究から早急に離脱し、縄紋土器の型式学的研究に打ち込んだ山内清男は偉い。実に偉い。

外来者

浜田耕作―考古学者は土器を正解して、人類過去の歴史を明にする永固たる証拠となす。(『通論考古学』一九二二年)

金関惣によると、「浜田が考古学教室を主催して一〇年間は専攻学生がなかった」という(『世界の考古学と日本の考古学』)「岩波講座 日本考古学」(一九八五年)。そう言えば、一九二〇年前後、弥生研究に重要な見解を提示する京都

大学関係者は、いずれも外来者であった。富岡しかり、梅原しかり、島田しかり、水野しかり。後日、唐古遺跡発掘の指揮をとり、弥生研究で最大の節目を実現する末永雅雄や小林行雄などもしかりであった(角田文衛『考古学京都学派』一九九四年)。

富岡謙蔵は、中国鏡との共存関係から、弥生土器は「後漢」を下らないと指摘。大陸との時間的關係を推察した(『九州北部に於ける銅劍銅鉞及び弥生式土器と伴出する古鏡の年代に就いて』『考古学雑誌八一九』一九一八年)。梅原末次は、弥生土器と共存する石器類が南朝鮮と密接に関係することを指摘し、その文化的系譜を見通した。島田貞彦・水野清一は、北部九州の甕棺を五型式に区分し、副葬された青銅器類で年代を推定し(『北九州に於ける甕棺調査報告 上・下』『人類学雑誌四三二一〇・一一』一九一八年)、甕棺研究の先駆けをなした。これらの成果は、混沌とした弥生論議から脱却し、考古学的な研究が確実に進展し始めたことを示している。

付録

浜田耕作―本邦発見の所謂弥生式土器の聚成を試み、其の形式に本きて分類せる図録を作成して、本冊に付載する所以なり。(『京都帝国大学文学部考古学研究報告三』一九一九年)

時に付録が大評判となる。浜田は、講座開設から三年目に「九州に於ける裝飾ある古墳」(一九一九年)を刊行。一見、弥生研究に無縁のこの本は、実は特別な意味をもつ。付録の「弥生式土器形式分類図録」(最初の本格的な集成図録)が理由である。一七四個の土器資料を収録。何故、弥生土器が裝飾古墳の付録かは不明。四枚の図版に、器種毎に分類され、水平方向を意識し配列。器

種は、皿・鉢・把手付鉢・壺・蓋・管・台付皿・鉢壺類・不明器など。縮尺は六分の一弱。製図は梅原末治。スケッチを脱し、実測図の感を呈する。それは、以降の弥生土器集成図録の型を決定づける原典となった。

問題もある。浜田は、ペトリー流の型式編年学を熟知していたはず。なのに、表題のごとく、型式分類図録にとどまり、型式編年を試みた形跡はない。師匠・ペトリーの有名な模範演技「把手付壺の型式学的編年モデル」に達せざる感がある。図録には、九州・関東の様々な土器が混在。同系列に限定しないと、形の類似性に基づくセリエーションや型式編年表の作成は困難である。痕跡器官への着眼も不明瞭。また、弥生土器から除外されるべき土器も多々含まれる。浜田も承知のこと。弥生土器と土師器の境目論議が展開する以前のこと、無理はない。議論が展開した今日でも、その境界の多くは不明瞭のまま。いかなる問題点を含んでいても、この付録は、弥生研究史上、極めて有意義であった。

焼米と粉痕

中山平次郎「筑後国八女郡長峰村大字岩崎字小坂竪穴址・焼米 大正十二年四月出土。〔焼米を出せる竪穴址〕『考古学雑誌一四一』一九二三年)

山内清男「榊形冢貝塚の土器に稲実の圧痕を有する者あるは、我石器時代人の中には稲を培養し、農耕を行いたるものありしを証明して余りあると云わねばならぬ。〔石器時代にも稲あり〕『人類学雑誌四〇一五』一九二五年)

世の中は、うまく行くこともあるし、うまく行っても問題を生じることもある。浜田が「弥生式土器形式分類図録」を刊行し、浜田型式学の大きな第一歩を踏み出した直後、別の側面から弥生文化の内実を示す重要な発見が、九州と東北で、ほぼ同時に生じた。一九二三（大正一二）年のことであった。中山平次郎が、更に福岡県八女市岩崎の竪穴から大量の焼米を発見。弥生土器Ⅱ稲の関係をかなり明確にした。

一九二五（大正一四）年四月。東北大学医学部解剖教室に勤務する二三才の気鋭・山内清男が、「石器時代土器底面に於ける稲粉の圧痕」を題する草稿を長谷部言人博士に提出した。宮城県榊形冢貝塚の土器を整理中、弥生的傾向を示す土器の底に四粒の粉痕を発見した報告であった。舛形冢式は、今日、中期初頭に位置づけられる。この草稿は、やがて「石器時代にも稲あり」の題目で『考古学雑誌四〇一五』を飾り、学界に衝撃を与えた。寒冷な東北の石器時代に稲作が実施されていた証拠を、詳細な観察文と鮮明なる粉痕拡大写真で提示したもの。実にうまく行ったやに思えた。山内は、その論文は長谷部博士が勝手に草稿を加筆訂正したとして、「未だに自分の稿である気がしていない」と激怒（『山内清男・先史考古学論文集四』一九六七年）。山内は、弥生農耕論の森本六爾や様式論の小林行雄にも激怒する学問人生を過ごすことになる。

若氣

森本六爾「かく三時代に亘る弥生式土器を総括して単に一様視することとは、はたして正当なるものと容認し得るであろうか。〔付録〕『考古学一』一九三〇年)

一九三〇（昭和五）年前後に時は進んだ。この頃、狂気と天分を備えた若き

鬼才が競合を開始した。その一人が森本六爾であった。奈良県磯城郡織田村大泉出身。一九二四年(大正一三)年、本格的な考古学活動を実践的すべく上京して来た。ベテランの中山博士が以前、「石器時代の弥生式土器、金石併用時代の弥生式土器、古墳時代の弥生式土器」があると表明していた。森本は、この温厚なる博士に対し、型式学的認識がないと叱責。そもそも三つの時代の弥生土器に型式差はないのか。石器や金属器との共存関係はどうなっているのか。層位関係は確認できたのか。矢継ぎ早に詰問(「北九州弥生式土器編年」一九三〇年)。あまり力むと世間から嫌われるかも。

更に森本は口速に力説した。編年には尺度がある。弥生土器に新式・古式がある。須玖遺跡では、古式と新式は型式学的に区別可能。甕棺を見れば明らか。古式甕棺は口縁部が「鏢状」で、古式の銅矛・銅剣を副葬する。新式甕棺は口縁部が「くの字状」で、古式の銅剣・銅矛を副葬した確例がない。甕棺の「くせ」は、一般の土器に共通する。そうしたことは、先学は誰も言わなかった。古式弥生土器は、秦漢式土器の影響で現われる。新式弥生土器は、祝部土器と共存することもある。甕棺は、祝部土器の頃には廃止される。弥生土器の編年研究は型式学でやるべし。土器の「くせ」に着目すべし。時代の「型」を発見せよ。共存関係も注目すべし。見解には理屈が不可欠である。等々。焦り気味に見える森本は、やがて弥生研究に大きく貢献をすることになる。森本は、活動の拠点として既に「東京考古学会」を設立していた。一九二九年のことであつた。

遠賀川

小林行雄―これは考古学界にとっては、満州事変の勃発に匹敵する大

事件であつた。(『考古学一路』一九八三年)

中山平次郎―福岡地方から夥しく出土する弥生式土器が大多数無紋単調の頗るつまらない土器であることは多くの方々の知つて居らるる所であるが、…。(『遠賀川遺蹟の土器と銅鐸及び細線鋸歯紋鏡』『考古学三一―二』一九三二年)

北部九州の弥生文化を最も象徴するのは、滔々と流れる遠賀川だという。川の波は美しい。正確には、遠賀川は弥生文化開幕の舞台からは大きく東に外れている。

一九三一(昭和六)年九月二〇日。その中州で新たな遺跡が発見された。発見者は名和羊一郎。川で投網打つ光景に引き付けられ、川原に降り立った結果であつた。福岡県伊佐座・立屋敷遺跡。時に、「遠賀川遺跡」と呼ばれる。小林行雄は、その発見は弥生研究における「満州事変勃発」のごとくと表した。以降、この遺跡に多くの研究者が訪れ、有紋土器片を採集し、各所の研究会や論文で報告した。訪問者の一人に、穏やかなる中山博士の姿もあつた。

中山博士他が採集した遠賀川の弥生土器には、篋描き羽状紋など、様々な有紋の土器が含まれていた。北部九州では、従来は、博士自身が「つまらない土器」と形容した赤褐色の無紋土器が主流であつた。遠賀川で発見された栗色の有紋土器の類例も、若干は知られていた。博士は、通常の無紋土器を「第一系」、新資料の有紋土器を「第二系」と命名した。同時に、第一系を第二系より古く位置づけた(「福岡地方に分布せる二系統の弥生土器」『考古学雑誌二二―六』一九三二年)。そうした先後関係の判断が、いかなる根拠によるかは不明。やがて、致命的な問題が生じることになる。ちなみに今日、第一系Ⅱ中期の須玖式、第二系Ⅱ前期の遠賀川式土器に該当する。

夕日

小田富士雄―中山の執筆活動は一九三五（昭和一〇）年で停止している。

山内清男・中谷治宇二郎・森本六爾・小林行雄。これらの若き鬼才達が意見を声高に唱えれば、ベテラン博士の情熱もたまらない。「縄紋式との近似多き式が古く、古墳時代の土器に近似ある式が新しいと考えるのが常道である」（山内清男一九三二年）。「弥生式土器に於いて、型式学上何等の区別なく一様である事は、遺物組合せの相違が必ずしも時代の相違を示す根拠とはならないことを示す」（森本六爾一九三〇年）。「弥生式土器文化が関門地方―北九州に第一歩を印した様に、第二系土器は安満B類土器の最初の足跡であろう事は恐らく正しいであろう」（小林行雄一九三二年）。すべてが、間接的ながら、博士への反論となった。確かに、第一系と第二系の順序付けは誤っていた。

博士には、何人にも負けない情熱はあったが、思い込みがやや先行し、型式学的認識が欠けていたようである。考古学的状況の十分な観察も必要であった。「狭義の弥生土器」と「広義の弥生土器」の差を実感し、「無紋系」と「有紋系」という異なる土器相を識別し、そこに「年代差」を認めた博士の眼力にもかかわらずである。私は、中山による立岩や今山遺跡の石器生産に関する研究（『今山の石斧製造所址』一九三二年・「飯塚市立岩字焼ノ正の石包丁製造址」一九三四年）に学びつつ書いた論文（『石包丁の生産と消費をめぐる二つのモデル』一九七四年）で考古学世界に登場できた経緯がある。個人的には、石器に関する博士の实在感だけが頭に残っている。

晩年の中山を訪ねた小田富士雄は、彼の座右には、かつて第二系の代表とし

た土器が置かれていたという。中山の活躍により、弥生土器の本場＝北部九州という認識は確実なものになった。博士の晩年は、滔々と流れ続ける遠賀川に、栄光の夕日が沈むがごとくであったという。

櫛と鏡

小林行雄―以上で弥生式土器における櫛目文様の研究を一先づ打切る事とする。（『櫛目式文様の分布』『考古学三一』一九三二年）

一九二九（昭和四）年、十八歳で弥生土器の研究を始めた小林は、翌年には森本六爾が主催する東京考古学会に参画。直ちに櫛目紋土器の研究を完成させた（『弥生式土器に於ける櫛目式文様の研究』『考古学一五・六』一九三〇年、『櫛目式文様の分布』『考古学三一』一九三二年）。小林は、クシ（実測道具）にも櫛（施紋具）にも強かった。その小林が関西で、安満（大阪府高槻市）と吉田（兵庫県明石市）遺跡の土器を検討した結果、中山平次郎に代わって、学史上、「遠賀川式」の命名者となった。「安満B類土器考」（『考古学三一四』一九三二年）・「吉田土器及び遠賀川土器と其の伝播」（『考古学三一五』一九三二年）・「吉田土器及び遠賀川式土器とその伝播」（『考古学三一五』一九三二年）は、それに関する論文である。

小林は、島田貞夫・水野清一による「安満A（櫛目紋）・B類（鏡描紋）」土器を、西日本全体を視野に入れて再検討。吉田遺跡でもB類の好資料を得られた。分析の結果、B類がA類に先行し、関西の安満B類が九州の第二系（有紋土器）に共通することを指摘。同時に、第二系が第一系に先行することも実感した。考古学者は通例、編年的に古い順に若い番号や記号を付ける。もしくはそう心がける。当初、安満A類（結果的に中期）・B類（同じく前期）の順序

は逆。中山の第一系（結果的に中期）・第二系（同じく前期）も逆であった。小林は、かかる前提条件に影響されなかった。彼は本能的に、型式編年の素養を具備していたようである。

明言

小林行雄―遠賀川式土器は、先ず北九州に第一歩を印して、稀にはその古い形のままで播磨（吉田）にまで文化を伝へたが、東漸しては安満B類土器となり、南漸しては肥後重弧文土器となつて、いづれも其間に若干の文化変相を生じた。（「播磨国明石郡玉津村吉田遺跡調査概報」『考古学三一五』一九三二年）

九州の中山と関西の小林による研究が、混沌とした弥生土器の群れに、先ず「遠賀川式（西日本）↓須玖式（北部九州）・櫛目式（関西）」という、時間的・空間的な秩序を与えた。それは、弥生土器に関する本格的な編年の研究の起点でもあり、弥生文化伝播に対する具体的な見解でもあった。結果的に中山の見解は逆転したが、小林の見解と相まって有効に作用した。小林は、九州の第二系が弥生土器全体の原点であること、ほぼ原形のまま関西に東漸すること、以降はそれらが地域的に変容すること等、弥生土器の動態に関して重要な諸点を明言した。

その明言で、両地方の多くの土器が時代的位置付け可能となった。例えば、かつての浜田の分類図録（一九一九年）には、弥生後期の土器や以降の土師器を主体に収録されている（もちろん、そのことが判明するのは後日のこと）。その多くは、第二系・安満B類や第一系・安満A類とは大きく異なる。とすれば、「それらの土器は何者か？」という疑問が生み出る。まさに引算の原理である。

次第に、「遠賀川式（西日本）」↓「須玖式（北部九州）・櫛目式（関西）」↓「それ以外の土器？」という三段階図式が、潜在的な内容を含みつつ、次第に浮かび上がってきた。

小林は、こうした前提のもと、関西の弥生土器に関し「それ以外の土器」⁴「無紋の土器の力強き存在」（畿内弥生式土器の「二相」『考古学四一』一九三三年）を実感。新たな論を展開する。無紋土器には精製と粗製がある。精製無紋は櫛目式に共伴し、多数の石器を伴う。粗製無紋は櫛目式に共伴することもあるが、共伴しないことが多く、石器は少数か皆無。粗製土器の多くは叩き痕がある。この土器こそ、遠賀川式でも、櫛目紋式でもなく、それ以降に位置すべきもの。小林は型式学的な論理に長けていた。彼は、一九三〇年に櫛目式、一九三二年に遠賀川式、一九三三年に粗製土器を説明するに至った。小林の諸論文に「前期・中期・後期」の用語が見えずとも、彼の頭中には「三期区分」は確実に存在していた。

分析と直感

森本六爾―北九州では弥生式土器を（一）遠賀川式、（二）須玖式、（三）東郷式に編年し得るのであります。．．．それぞれ、前・中・後の三時期位に分ち得るのであります。（『考古学』「歴史教育講座二」一九三五年）

森本六爾―弥生式の文化は、（一）北九州一部から、（二）九州地方及び中国四国西半に、更に、（三）中国四国東半及び近畿西端に、（四）近畿一般に、（五）伊勢湾沿岸に、（六）中部地方に、（七）関東地方に、（八）東北地方に、順次伝播しと思われ。．．．（同上）

一九三五（昭和一〇）年、森本六爾は、北部九州の弥生土器に関し、「遠賀川式Ⅱ前期」↓「須玖式Ⅱ中期」↓「東郷式Ⅱ後期」という三期区分を明言した。小林行雄による関西の三期区分と並び立つもの。かくして両雄（表面上は、森本が東京考古学会の主催者。小林は若き会員という、一種の子弟関係？にあつた）は、北部九州と関西、ひいては西日本の三時期区分という時間枠組を構築したのである。

ただし、その過程が、小林が「分析的」だったのに対し、森本は「直観的」であつた。すべての点で、そうであつた。森本に師事した藤森栄一の言葉では、森本が「物を感覚し感知する力」を具備していた故（私の見た弥生式土器聚成図録の生立ち）『考古学二一―五』一九四〇年）であり、今日の識者・都出比呂志の言葉では、「短文で洒落た表現のなかに本質をついた主張を盛り込むことを好んだ」（『森本六爾論』『弥生文化の研究一〇』一九八八年）が故となる。否、「氣を負い功を急ぐ青年」（浜田青陵）故だったかも知れない。小林が、「自分の想いを弥生土器に語らそう」と、順次、その型式学に努めたのに対し、この森本は「自分の想いで弥生土器を語ろう」と、瞬間に、想念の考古学に努めた。個性に由来する無意識でのこと。両雄は表裏一体。異なる言葉を使つても、見解は同様であつた。森本は同時に、上の空間的枠組Ⅱ地域区分も合わせて明言した。日頃から森本と頻繁にコミュニケーションをとつていた小林に、異論があるはずがない。森本の見解でもあり、小林の見解でもあつただろう。

群雄割拠

山内清男―不遜なる追従者あり。（『稲の刈り方』『ドルメン三一―二』一九三四年）

一九三〇（昭和五）年前後は、弥生研究史上、希有な群雄割拠の時代であつた。勇者が多数いたわけではない。若き中谷治宇二郎・森本六爾・小林行雄・山内清男と中山博士の五人であつた。若き四人は、才氣・氣迫・情熱・理屈・実践・競争心を具備。夢も希望も大きかつた。暗黙の競争意識は強烈であつた。「小林様式論」対「中谷様式論」、「山内農耕論」対「森本農耕論」、「森本・小林土器論」対「中山土器論」他。かかる問題はさておき、この時代の特記事項を二点だけを紹介する。

第一は実質的な点。小林行雄による実測道具（クシ・マコ）の活用は特記される。従来は三角定規と鉛筆が主たる武器。マコは、竹ヤリに対する鉄砲のようなもの。これで迅速・正確な実測が可能。一九三〇年に東大人類学教室での実践が最初だったらしい（小林行雄『考古学一路』一九八三年）。小林は本を刎り貫いて中に入れ、マコを持ち運んでいたという。小林以前に能勢丑三が既に使用していた。藤沢一夫が改良型を作つた。最近ではアメリカ考古学の教科書にマコが載っている。等の話は些細なこと。マコの存在で、『弥生式土器聚成図録』（一八三八年）への道程を歩み始める条件ができた。克明な実測は克明な観察を、克明な観察は、形状・分量・紋様・成形・調整・胎土・色調・器種・機能・型式・編年・分布に対する認識を促進し、様々な議論が展開する条件を用意する。

第二は理論的な点。資料整備の物理的条件が用意されると、弥生文化全体をいかに考古学的に把握・認識するか、つまり方法論構築の必然性に迫られる。幸運にも、才氣溢れる勇者達の心構えは十分。認識論の才能も具備していた。「中谷・様式論」（『日本石器時代提要』一九二九年）、「森本・農耕論」（『日本原始農業』一九三三年）、「山内・型式学」（『日本遠古之文化』一九三二・三三年）等はその産物である。

宣言

森本六爾―本会は、創立第五周年記念事業として、「弥生式土器聚成図録」の完成刊行を企画し、其の準備に着手したが、期待をもってここに発表しよう。其の聚成図録は、約一〇〇〇個の弥生式土器の実測図を内容とし、出来得べくんば秋一〇月の頃に世に送りたいものである。（「編輯言」『考古学五一』一九三四年）

「卒論をどうすれば卒業できますか？」と質問した学生さんに「土器一〇〇〇個を描いたらできますよ」と冗談で答えたら、驚いたことに、彼は山茶碗一〇〇〇個を実測してきた。この話は無関係である。

森本六爾は、一九三〇（昭和五）年、東京考古学会を創設。機関誌『考古学』の創刊をもって「弥生文化＝稲作文化」の検証に専念し始めた。実測に情熱を燃やす若き小林行雄との遭遇が、後日、『聚成図録』宣言に結び付く。一九三二年、一年間のフランス滞在から帰国。森本は三年間で四十五編もの弥生関係の論文を執筆した（都出比呂志「森本六爾論」『弥生文化の研究一〇』一九八八年）。土器論では、煮沸用甕と貯蔵用甕の組合せが、弥生土器の「一つの真実における二つの姿」等の見解を発表。様式要素に関する重要な提言をした（「弥生式土器に於ける二者」『考古学五一』一九三四年、他）。

小林は更に、「三つの性格（飾られざる土器・飾られ得る土器・真に飾られた）・四つの用途形態（煮沸・貯蔵・供献・特殊）・五つの形式（甕・壺・鉢・高坏・飾壺）」が弥生土器の様式構造と明言。その成長（前期）・持続（中期）・変改（後期）を究明する必要性を説き、弥生土器に関する自らの様式論を確立した（「弥生式土器の様式構造」『日本先史土器論』一九三五年）。

一九三四年、森本は、顧問、浜田耕作や実測者・小林らの存在を背景に、高らかに「弥生式土器聚成図録」刊行の夢を宣言。土器実測を開始した。だが未完のまま、一九三六年に三二才で死去。図録完成の仕事は小林に託された。

声

小林行雄―森本さんの晩年は読書と思索が生活の全部であった。森本さんの好きだったヴァレリーの言葉がある。「日は思念を明るくす、思念は夜を明るくす」。（ひととせの記）『考古学七一・二』一九三七年）

藤森栄一―一粒の初、若し地にこぼれ落ちたらば、遂にただ一粒の初に終わらないであろう。（序）『日本農耕文化の起源』森本六爾著一九四一年）

梅原末治―人の世に生起するさまさまの痛ましい出来事のうち、とりわけ胸を打つのは志業に専念している有能の士が道半ばにして倒れることである。（序）『日本考古学研究』森本六爾著一九四三年）

浜田青陵―私は君が悪戦苦闘其の理想を実現しつつある実際を見ては、同情に堪えず、又た我々老人組は之を助けるのが学界の義務であることを思い……。〔森本君を憶ふ〕『考古学七一三』一九三六年）

東京考古学会同人―個人の権威のみが、余りにも偏重された時代は既に過ぎた。（東京考古学会改組に際して）『貝塚四』一九三八年）

都出比呂志―飛翔中の鳥は射落し難い。動いているからだ。森本六爾の評価がマチマチな理由の一つは、彼が三二才の若さで、つまり変化の過程で死んだためである。「森本六爾論」「考古学研究一六―四」一九七〇年)

地元―わが故里・桜井市が生んだ数々の偉大な人物は、聖徳太子をはじめとして数限りがありません。考古学の分野でも、何人かの人物をあげることができませんが、病のために若くして研究の志を挫折された偉大な学者に、森本六爾氏がおられます。(桜井市埋蔵文化財センター「森本六爾氏生誕九〇周年記念『二粒の粉』展」一九九三年)

特異状況

一九三六年―二・二六事件発生、一九三七年―蘆溝橋事件発生、一九三八年―国家総動員法発布(各種年表)

一九三七年前後は、考古学に特異状況が生じた。中山博士は小林らに土器論を批判され既に失速。森本六爾は生前、藤森・藤沢・小林ら側近に、『図録』刊行を優先すべく、弥生土器に関する独自の論文を禁止していた。一九三六年、森本死去。分類学の異才・中谷治宇二郎も三五才で死去。弥生農耕論で森本と確執した型式学の天才・山内清男は、一九三七年に『先史考古学』を創刊、縄紋土器の研究に没頭し始めた。同年、森本が夢見た唐古遺跡の発掘開始。一九三八年、森本を援護し、唐古発掘で末永雅雄を指導した浜田耕作も五八才で死去。京都大学考古学研究室助手となっていた小林行雄と、森本の最後を見とった東京の杉原莊介が残った。

寒風

編輯者―我々の心楽しく申し述べたいことは、今回の調査に於いてこれまで東京考古学同人が建設し来たつた弥生式文化の研究の正当さが、豊富な資料と遺跡の実際によつて適確な実証されつつあることである(編輯者より)『考古学八―二』一九三七年)

一九三七年一月のこと。大和盆地の中央。寒風吹く中で、末永雅雄の指揮によつて、唐古遺跡の緊急大発掘が始まった。教室勤務の小林は土日曜だけは姿を現したが、当然ながら、森本は姿はなかった。

軍隊の先輩が末永雅雄をわが故郷・丹波篠山へ招請。その時の講演が、少年に私の興味を増幅させた。後日、高名な地理学者になる藤岡謙次郎も唐古発掘に参加。報告では石器類を分担するが、その原稿全体を小林が書き直したという(『唐古報告』)。晩年の藤岡と私は奈良大学で同僚となった。羽田秀典という慎ましい学生も参加したが、目立った活躍はなかった。羽田(後に戸田秀典となる)は私の大学での恩師である。小林の土器整理を助けた坪井清足は、後日、池上遺跡の大発掘を指導。(財)大阪文化財センターも設立した。私は坪井の下、池上遺跡の発掘に参加し、同センターの職員になった。

池底から露出される様々な実情は、小林行雄の考えを不必要とした。すべてが眼前の実情にあつた。どのような壺が、どのような甕や高坏や鉢と共伴するか。眼前の実情を云々することなく、正確に観察・実測・図化するれば、そのまま小林の考えに結び付く。森本六爾が夢見た「弥生文化」稲作文化の検証は、誰の目にも明らかだった。森本に代わり『考古学』編集担当となった小林は、森本―東京考古学会の魂が乗り移ったように、唐古発掘の歴史的意義を公言し

た。結果、末永雅雄の「発掘日誌」の末尾に次の一文が付記された。唐古発掘の指揮者・末永にとって、東京考古学会は、いわば「厄年」のような存在。発掘は、あくまで寒風の下であった。

謹告（前号「編輯者より」の文中、唐古遺跡に関する條を或る事情により削除す）（『唐古遺跡発掘日誌』『考古学八―三』一九三七年）

厄年

旅人―一時間・五キロメートル。三時間・一五キロメートル。一日・三〇キロメートル。

数年前の話である。若かった私も、いつしか厄年を迎えた。弥生研究に従事できる喜びと学恩を受けた先学への感謝と、厄払を祈願し、「唐古詣」を実施した。毎朝、唐古池に出勤。唐古を起点に任意の方向へ夕方まで歩く。翌朝も唐古から別方向に出発。毎日・毎日、四方・八方。雨天決行。大和盆地は隈無く走破。箸墓近くで纏向石塚を寺沢薫が発掘中。各所で発掘現場に遭遇した。近隣の拠点集落も訪問。鴨都波・大福・四分・志紀……。唐古の隣村も確認できた。一日で往復可能、一日で到達可能な村々も確認できた。一時間・五キロメートル（日常生活圏）。三時間・一五キロメートル（一日往復圏）、一日・三〇キロメートル（一日到達圏）。唐古の東は「タハタ・ヤマの世界」。南は「ムラ・ムラの世界」。西は「ミズ・フネの世界」。北は「ハカとミチの世界」。思えば、ヴィタリフィンジラの「サイト・キャッチメント・アナリシス（遺跡の領域分析）」もかかる作業の積み重ね。ニュー・アーケオロジストのケント・フラナリーも中央アメリカの山中で同様の修業をした。

大和盆地を四周する山脈も横断。外界にも遠征。気が向けば、前日の到着点まで電車で行き、更に延長上を歩む。唐古の西方、サヌカイトで有名な二上山を越えた北側は河内平野。南河内を経て和泉の海岸平野。私も発掘をした亀井や四ツ池や池上遺跡にも到達。唐古の北東、河筋を下つても河内に至る。大阪湾・六甲山麓・紀ノ川・淀川・山城・大和高原。等々。盆地外各所の拠点集落も貫通。国府・瓜生堂・池上・亀井・鬼虎川・安満・田能・楠木荒田町、神足、太田黒田……。明石から淡路島も縦走。徳島に至る。大阪湾沿岸の製塩遺跡を巡りながら、紀伊・白浜に至る。気持ちはいつしか唐古人。麦酒片手の弥生人！ 厄払いの結果は、ギックリ腰一件であった。

淡々

小林行雄―こうして一七五〇余個の実測図を集め、そのうち一二九六個を、一二地域に分けて収録した、四六枚の図版の出版にこぎつけたのは、昭和一三年の九月であった。（『わが心の自叙伝』『考古学一―路』一九九四年）

唐古発掘の翌一九三八（昭和一三）年九月。小林は情熱をもって、森本の遺産に負債たる『弥生式土器聚成図録』を完成させた。構想から六年。ついで、藤森栄一・藤沢一夫・七田忠志・坪井良平等が各地を実測に奔走した。同年一月六日、日本橋倶楽部にて、図録出版記念講演会が開催された。演題は、藤森栄一「信濃地方の弥生式土器」、杉原莊介「北関東の弥生式土器」、小林行雄「弥生式土器に就いて」。その後、人形町花家料理店で晩餐会が催された。以降、難解な様式論の解説のため、東京考古学会では小林行雄の上京を求めることになる。

この頃、意外にも小林は、弥生研究の展開でなく、総括を進めていた。小林は「日本文化史体系」（一九三八・一九四三年）で「弥生式文化」を担当。弥生式文化全体を概説すると共に、「弥生式土器」の項では、持論の「土器文化推移モデル（前期⇨遠賀川式⇨中期⇨須玖式・櫛目式⇨後期⇨穂積式・粟林式・久ヶ原式）」という「三つのシステム論」を解説した。用語は斬新だが、そこに展開はなかった。「様式論」や「五様式体系」の誇示も大いなる理屈もなかった。新たな展開をもって良とする小林論文には珍しい。唐古の写真も掲げられたが、さほど意味のない全景や遺物の出土状況等であった。淡々と自らの弥生研究を解説しただけであった。

あばよ！

酒詰秀一「一九三八年よ！ あばよ！（東京考古学会「編輯後記」「頁塚四」一九三八年）

一九三六年一月、悪戦苦闘の森本が志を抱きつつ逝き、翌一九三七年三月、嵐の唐古発掘が無事に終了し、翌一九三八年一〇月、小林は森本の遺産「聚成図録」を刊行した。そして、弥生研究の世界に静けさが戻った。一九三八年一月一日における小林は、「無言唯有微笑」（「頁塚三」一九三八年）であったという。

五様式

小林行雄「唐古弥生式土器に存する五つの様式を、かくの如く第一様式から第五様式への順序に継起したものと見ることの妥当性がよい

よ容認せらるべきである。（「大和唐古弥生式遺跡の研究」一九四三年）

唐古発掘から六年後に「大和唐古弥生式遺跡の研究」（一九四三年）が完成した。小林は、弥生土器の「唐古五様式体系」（新モデル）を構築した。同時に、畿内の他の遺跡の状況とも照らして、それが「畿内五期区分」になる可能性も提言した。

『聚成図録』の「畿内五様式区分」（旧モデル）は、弥生土器の型式学的観点から時間的に繋ぎ合わせたもの。いわば想念の産物であった。一方、「唐古五様式体系」は、一遺跡での弥生土器の共存関係を根拠とした実情の産物である。旧・新モデルの軌が一と理解し、前者から後者への展開を評価することも可能。私見は異なる。前者が仮説として機能し、後者がその検証として機能したと理解する。両者が科学的过程の前後関係で連結したと評価したい。と同時に、唐古五様式体系が再び仮説たる存在となり、新たな調査・研究で再検証する作業が不可欠となる。

様式論

八幡一郎「彼（註 中谷治宇二郎）はビールで幾分生氣を取戻した。五時頃から十一時過ぎまでに二人で二十三本のビールを傾けた。（「追想断片」『日本縄文文化の研究（中谷治宇二郎）』一九六七年）

考古学者の話には度々、酒が登場する（『考古学者の考古学』一九九〇年）。小林行雄は晩年、訪れた弟子・宇野隆夫に自らの様式論を、皿やコップの横に一升瓶を並べ、「私の様式はこれらをすべて含めたものです」（小林先生に教えられたこと）『小林行雄先生追悼録』一九九四年」と語ったという。

この時の「小林・様式論」(B)は、かつての「小林・様式論」(A)とは異なる。Aは小林の若き時代の「型式学的様式論」。Bは晩年の「組成論的様式論」である。ちなみに、森本六爾は「機能論様式論」(C)。中谷治宇二郎は「分類論的様式論」(D)。佐原真は「技術論的様式論」(E)である。私は、内容は未定だが、「社会学的様式論」の用語だけ設定している。

壊すのは誰だ

小林行雄・末永雅雄―唐古遺跡における百数十基の竪穴類は、決して或る一時に廃棄せられたものではなく、永い年月の間にその或るものが作り加へられ、また或るものが棄て去られて徐々に交替して行つたものと解するほかないである。(『大和唐古弥生式遺跡の研究』一九四三年) (註 下線は筆者による)

小林の五様式体系を支持する立場を明記し、仮説モデルの構築に関し見解を述べる。その構築には、考古学的実情が根拠となつても、なら無くても結構。重要なのは、モデルの妥当性が検証可能な程に明快なこと。小林モデルは実に明快である。小林は一応、様々な土器の共存関係によつて各様式を設定。五様式体系を構築した。実際には五区分に確たる根拠はない。小林が決断すれば、七区分でも一〇区分でも選択が可能であつた。小林は「五」という数字を選択しただけのこと。

例えば、新旧型式の土器の共存・混在する状況をもつて、一様式を設定することも可能である。そうした認識は様式論の根本原理である。事実、私の研究室の本棚には古い本と新しい本が共存・混在する。状況変化をいくつの様式に区分するかは各自の自由である。決断の問題である。過渡期概念を強調し、各

様式の境目に別様式を設定すると、五様式体系は直ちに一一様式体系に倍加する。新旧様式の共存・混在と組成率の変化は、頻度によりセリエーション技法の根本原理である。社会変化の一般的な実情でもある。同時に、各様式内も細分も可能。後日、佐原真は第一様式を古・中・新の三段階に、坪井清足は第三様式を古・新の二段階に、第五様式は各者が数段階に細区分。かかる私見を述べても、五様式体系は今日の弥生研究には極めて有効である。パラダイムの転換を意図する勇氣ある研究者に切望する。唐古五様式体系を崩すのは誰だ!

兄弟

アダムス兄弟―一九八三年夏の午後、二人の兄弟―本書の著者―はカリフォルニア山脈にハイキングに出かけた。二人が一緒の時は常々そうであるように、会話は二人に共通する知的関心事に及んだ。(『考古学的型式学と実質的存在』一九九一年)

時代が変われば評価も変わる。研究者が違えば評価も違う。新資料の出土で仮説も変更。時代区分次第で、弥生土器は縄紋土器にも土師器にもなる。だから考古学は面白い。突然だが、カリフォルニア大学の哲学者・W。アダムスとケンタッキー大学の考古学者・E。アダムスという兄弟を紹介する。二人の会話は、型式学に関する重要な論文を生み出した。この論文では、型式学の本質を紹介し、中世ヌビアの土器分析を試み、型式学のパラダイムを構築し、また分類・型式・説明・理論等に対する認識を提示。注目すべきは、考古学と哲学という両側面から対等に議論している点。日本考古学では、哲学者が考古学に参画することはない。一読を願いたい。

考古学者は、タイム・マーカーたる土器を観察・分類・編年し、時代枠組モデルを構築する。この時点で大きな悩みを抱える。主観優先か、客観優先か。弥生人は当時、弥生土器を五区分していたか否か。答えは明快。否。彼らは五という数字にも無関心であった。考古学者が、自宅の食器分類に無頓着なのと同様。小林行雄の五様式体系に私も賛同。それを踏まえ弥生研究に努めている。だが、弥生人は弥生時代を五様式体系で構築してはいなかった。われら研究者は、自らの目的や固有の感性によって様々な考古学的状況を観察し、過去の人間の行動・文化・社会・等々を認識するため、合理的な仮説モデルを構築するのが仕事である。弥生人とは関係ない。

ひとこま

水野正好「君は府の職員、用があれば裏木戸から入れ」と言われた。

〔小林先生―そのひとこま・ひとこま〕「小林行雄先生追悼録」一九四四年

森本六爾に憧れ考古学を始めた水野正好・現奈良大学学長と、小林行雄の最後の門弟である泉拓良・現奈良大学教授と、単なる私の三名は、晩年に小林邸を訪問。玄関からの入場であった。入口横の応接間で、私はいじいじしながら、無口に、彼らのはずむ会話を聞いていた。「唐古の土器は、なぜ五様式区分でなければならぬのか」を質問すべく、心中に嵐のごとく願望が渦巻いていた。明らかに力み過ぎていた。私は、無口のまま小林邸を後に、今日、最大の心残りとなった。

転換

小川清―ケチなトロッコ作業位でテングになっていたんでは、シュリーマン氏は天国でどんな顔をしているだろう、おそらく笑いように困っているだろうね。（『東京学生考古学会々報二』一九四八年）

小林行雄―戦後の日本では価値観の転換が頻発した。（わが心の自叙伝）「考古学一瞥」一九八三年

戦前の唐古発掘に対する、戦後の東京学生考古学会員・小川清の気持ちはそんなもの。以降、小川がいかなる考古学人生を過ごしたかは知らない。小林行雄が懐古するように、戦後は様々に価値観が転換した。一九四八（昭和二三）年四月二日。日本考古学協会設立され、研究体制にも大きな変化が生じた。弥生土器に雄弁だった小林行雄は、古墳時代に対して雄弁になり、弥生土器に対しては無口になっていた。

その後の主役は「考古学の鬼」（戸沢充則の弁）と呼ばれた杉原荘介が演じた。杉原は既に、千葉県須和田遺跡他の調査等で、「須和田式↓宮ノ台式↓久ヶ原式↓弥生町式↓前の町式」という関東地方の編年（一九四二年「上総宮ノ台遺跡調査概報補遺」）「古代文化一三―七」（一九四二年）や、福岡県立屋敷遺跡の発掘により、北部九州の土器編年も構想していた（『遠賀川』一九四三年）。杉原も、小林同様、森本六爾の東京考古学会に由来するが、一九四九年から、新たに明治大学を拠点とする活動を披露し始めた。「小林・様式論」や「唐古・五様式体系」とは別に、独自の理論構築を目指し、既に「原史学序論」（一九四六年）を刊行していた。

混乱

杉原莊介―北九州においては伊佐座式土器、畿内地方においては唐古

IV式土器の発生をもって弥生時代の後期の開始となし、その年代を西

暦後一〇〇年前後としたい。〔日本農耕文化の生成〕一九六〇年〕

一九五一（昭和二六）年から一九五八（昭和二三）年迄の八年間は、日本考古学協会が母体となって、九州―中部の二五遺跡を発掘。明治大学の杉原が指揮したが、集う研究者は多様であった。各地の研究者を結集した新体制のプロジェクトであった。「弥生土器文化の起源とその成長」の解明が課題。結果的には「日本農耕文化の生成」（一九六〇年）として刊行された。得られた弥生土器資料は西日本各地の基礎資料となった。一九六四年頃までは、いわゆる「日本考古学協会の時代」を呈した。

杉原指揮の下、各地の土器資料は、全国的な編年体系として構成された。標準型式を確認すべく、北部九州は「板付↓立屋敷↓下伊田↓城ノ越↓須玖↓伊佐座↓水巻町」の七型式、畿内は「I a ↓ I b ↓ II ↓ III ↓ IV ↓ V」の六型式に区分。畿内最古のI a 式は北部九州の二番手Ⅱ立屋敷式に平行させた。これを前提に、各地の土器型式が組み込まれた。そこで、時代区分に関し若干の問題が発生した。

例えば、唐古IV式の発生を弥生後期の開始とみる見解もその原因となった。畿内では、第四様式と第五様式との間に土器型式上の断絶があり、第三様式と第四様式には区別し難い連続性がある。『唐古報告』で小林は、「第四様式」の或るものは第三様式との分離が困難であり、また或るものは前者の系列中の遅れた段階に属するものと認められたが、・・・述べた程。「弥生後期」と呼ぶ場合、

北部九州の伊佐座式や畿内の第四様式を含むか含まないかでやや混乱が生じた。実は、かかる些細な混乱よりも、本質的には研究上の停滞が問題であった。こうした時、縄紋土器研究における山内清男の出現のような突発的事件が必要であった。

この他、最も注目された福岡県板付遺跡では環濠集落の一端が発掘され、環濠下層で夜臼式と板付一式が共存したことから、以降、環濠集落論や縄紋土器から弥生土器への移行過程の論議に問題提起することになった。この問題は別に紹介する。

症候群

小林行雄・杉原莊介―弥生式土器の集成図としては、過去において、森本六爾と小林とが編集した『弥生式土器聚成図録』（昭和一三・一四年刊）と、小林・杉原の編集による『弥生式土器集成』資料編（昭和二三・三六年刊）との二種が出版されている。本書はこれらの二種の集成図を継承して作成したものである。（『弥生式土器集成 本編一』一九六四年）

『唐古報告』（一九四三年）から小林・杉原『弥生式土器集成 本編二』（一九六八年）までの二五年間は、弥生土器研究の確立期であると同時に、また停滞期でもあった。浜田が提唱し、森本が企画し、小林が完成させた『聚成図録』の精神を受け継ぎ、同じスタイルで別の土器集成を刊行。合い言葉は「六分の一」。主役は杉原莊介。小林は名を連ねたが、新たな展開に挑戦しなかった。

杉原は、日本考古学協会内に「弥生式土器文化総合研究特別委員会」を設け、『日本農耕文化の生成』プロジェクトを実施し、その勢いで『弥生土器集成資

料編一・二」や「同本編一・二」等を刊行。積極性は際立った。だが伝統の継承は、時に発展を阻害する。資料数は増加し、地域も拡大するが、土器集成の基本スタイルは不変であった。従来の慣性が強く作用し、「弥生式土器聚成図録症候群」たる硬直現象を引き起こした。

この間、独自の理論構築を試みた杉原「原史学序論」も期待されたが、極度に難解すぎた（岡本勇一九八八年）。関係者の後藤守一（一九四三年）や和島誠一（一九四七年）も困惑。杉原の子弟にも趣旨が伝達できず、理論的後継者は育たなかった。杉原が中心となった登呂発掘や「農耕文化の生成」プロジェクトは、考古学全体の展開には作用したが、弥生土器研究の展開にはそれ程は作用しなかった。弥生文化の伝播モデルも自信をもって提示したが、今日、これが引用されることは全くない。

さびしん

杉原莊介―畿内地方の弥生式土器の研究は、小林行雄氏によってなされた結果が受継がれているが、重要な地方にもかかわらずその後の調査があまり行なわれず、資料上の追加補訂が見られないのは少しさびしいのである。（「弥生文化」『日本考古学講座四』一九五五年）

飛躍もあれば停滞もある。小林は再飛躍せず、杉原も展開を指向したに留まった。小林・五様式体系は全国に波及せず、畿内五様式区分たる体系にとどまった。畿内は「様式論」。各地は縄紋土器と同じ「型式学」での風潮が強まった。それでも発掘や考古学そのものは、見かけ上は活発であった。

杉原らは、戦後の弥生研究を総括すべく「日本考古学講座四」（一九五五年）を刊行。当初、期待されたこの本は、今日、引用されることは少ない。杉原の

コメントは、畿内だけでなく、当時の全国的実情を言い当てていた。同書の「近畿」担当は、小林でなく、中村春寿。彼の土器論をみれば、畿内の停滞は明白であった。北部九州の「前期土器論」だけが、やや展開している感じがあった。これとて停滞の中。学史における安定状態は、同時に停滞状態でもある。そうした状況が過ぎつつあった半ばのことである。

半島上

佐原真―一九六四年、紫雲出の報告書の原稿が、ようやく終盤を迎えた時、その山頂に立ちたい、という衝動がおさえられなくなった。……

お願いすると、烈火のごとく叱られた。（「三回ほめられたこと」『小林行雄先生追討録』一九九四年）

一九五五（昭和三〇）年一二月。新たな展開が、瀬戸内海に突き出た半島上で生じ始めた。標高三四九メートルの山上の高地性集落Ⅱ紫雲出遺跡の発掘が開始された。山上には寒風が吹いていたが、各者に希望が感じられた。担当者は小林行雄。小林は、既に古墳研究に集中していた。小林の下、発掘に参加した若き研究者達は後日、しかるべき考古学者となる。坪井・小野山・堅田・金関・田中・松本・六車。佐原の姿は発掘現場にはなかった。調査後の土器整理は当初は中尾芳治が、後に佐原真が従事した。三回の発掘は、直ちに高地性集落論に問題を提起したが、弥生土器論への貢献は一〇年以上も後のこと。その間、新しい主役が密かに成長した。報告書「紫雲出」（一九六四年）の刊行で、佐原は本格的に弥生土器研究の世界に登場する。

身震い

イアン・ホダー―書棚からその本をとった時、身震いがした。(「ヨーロッパの考古学理論―この三〇年―」一九九一年)

一九六四(昭和三九)年九月。誰もが「紫雲出」刊行に身震いを実感した。これは、弥生研究の激みを急流に変える促進剤になった。紫雲出発掘から、「弥生式土器集成 本編二」刊行(一九六八年)迄の一三年間は、縄紋土器の山内清男と弥生土器の小林行雄という両系譜をひく佐原が、弥生土器の製作技術論を展開させる時代となった。彼は既に、「土器における横位文様の施文方向」「石器時代三」(一九五六年)や「弥生式土器製作技術に関する二三の考察」「私たちの考古学 五一四」(一九五九年)等で非凡な才能を見せていた。彼はまた語学の才を生かし、海外の土器製作技術の吸収・普及にも努めた。前走を踏まえ、紫雲出で大きく飛躍した。

紫雲出の土器研究では、材料・粘土帯つみあげ・器面のおさえつけ・平滑化・刷毛目調整・筒状部分のしめつけ・ヨコナア調整・凹線紋・櫛描紋・回転台・鏡削り・鏡磨き調整・色調と焼成技術・黒斑等、製作技術の基本要素全体を意識し、個々の土器を観察すべきと説き、また実践した。器種構成の基本は、壺・甕・鉢・高坏の四種。だが、各器種の徹底的な細別も心がけた。詳細な観察内容は、伝統の「六分の一」実測図での表現は無理。「四分の一」を採用した。

女性問題

デーラーこの本は人類学の一部としての考古学に関心がある(考古学への招待)一九六七年)

「紫雲出」刊行の翌年、アメリカでも身震いする論文が発表された。ジェームス・デイーツの「The Dynamics of Stylistic Change in Arikara Ceramics」(一九六五年)である。これは、社会構造と居住性と土器製作の関係、社会変化と土器変化の関係を論じると共に、土器製作者が男か女かという判断が考古学的に意味を持つ可能性を指摘したものの。土器研究が単なる土器研究にとどまらず、親族関係や社会構造や社会変化との連結の中で実施すべき提言は、わが国の土器研究に新たな展開を迫った。時あたかも、当地では「ニュー・アークオロジー運動」が展開され始めた。今日、弥生土器(北部九州の甕棺を除く)の製作者が女性との見解は、堅田直(口頭)や佐原真(「弥生土器」一九七六年)がとっている。土器製作と女性の関係について様々は、都出比呂志(「原始土器と女性」「日本女性史」一九八二年)に詳しい。

大和政権

田辺昭三・佐原真―大和政権は、突然に出現したのではない。この自明の事実を前提として、弥生時代の畿内を問題にしたい。(「近畿」日本考古学Ⅲ一九六七年)

紫雲出の分析は、地域的・時代的に限定されていた。後日、田辺昭三・佐原

真は「弥生文化の発展と地域性 近畿」（『日本の考古学Ⅲ』）を担当。「第一様式壺の変遷模式図」や「土器様式からみた畿内と隣接地域との関係」・「土器様式の年代」等の諸モデルを積極的に提示した。同書での他の担当者が、弥生土器の解説に終始したのに対し、分析結果や仮説モデルを提示。弥生土器に対する先進性が目立つ結果となった。

同時に、問題も生じた。佐原らは、大和政権出現を前提に、畿内の櫛描紋土器を過大に評価し、弥生土器論を展開した姿勢が、各地の研究者に「畿内モノロー主義」と受けとめられた。畿内と他地方に高低ある評価をした結果であった。弥生文化発祥の地Ⅱ北部九州の研究者には特に嫌悪感を誘った。それでも、佐原の製作技術論は重要であった。

製作技術

佐原真一畿内を中心とする地域では、櫛状工具を土器面上に引いて描くA種（直線文・波状文・簾状文）は、土器を上からみて時計回りに描き、始めから終りまで土器面から櫛を離していない。一方、土器面から一回毎に櫛を離して描く単位文を重ねるB種（列点文・扇形文）は、逆時計回りに描く（『弥生土器の技術』『世界陶磁器全集一』一九七九年）

師匠・小林行雄は紋様に主眼を置き弥生土器を論じ、弟子・佐原真は製作技法に主眼を置き弥生土器論を展開した。畿内を象徴する櫛描紋を、小林は「直線文・波状文・簾状文・斜格文・櫛目文・弧状文・流水文」の七種に分類。対する佐原は「A種・B種」の二種に統合。中期土器を論じた。小林はマコで土器の形状を実測することを心がけたが、佐原は土器断面を観察することを心が

けた。師弟間で、弥生土器を構成する諸要素の観察から、弥生土器の製作技術の観察へと方法論が変化した。佐原の研究は、小林が提唱した重要なものを選択し、関連に従って統一総合する作業を実現した。

今日、佐原・製作技術論の延長上に、横山浩一「刷毛・櫛目工具論」（『刷毛目調整工具に関する基礎的実験』『九州文化史研究所紀要二三』一九七八年）、中村友博「施紋技法論」（『土器様式変化の一研究』『考古学論考』一九八二年）、川西宏幸「煮沸用甕成形論」（『形容詞を持たぬ土器』『同左』一九八二年）、深沢芳樹「弥生土器成形技法論」（『土器のかたち』『紀要I』一九八五年）、家根祥多「粘土紐接合論」（『縄紋土器から弥生土器へ』『縄紋から弥生へ』一九八五年）、森田克行「複合櫛描技法論」（『複合櫛描文』『弥生文化の研究』一九八八年）など、多くの優れた研究が位置することになる。とにかく、弥生土器の背後には人間が存在した。

六頁

田中琢一「聚成図録」の畿内第六様式に記載されている庄内出土の甕（図20）は、現在他の庄内出土土器と共に東京国立博物館に収められている。（『布留式以前』『考古学研究』二二二一九六五年）

大和政権の誕生と土器の関係を論じるには、櫛目紋土器以上に、「庄内式」土器に対する認識が重要である。小林行雄は、弥生研究の三羽カラスならず、優れた六羽カラスを育てた。坪井清足・原口正三・田中琢一・佐原真・田辺昭三・都出比呂志。田中琢一「布留式以前」は本文六頁の小論だが、反響は大きかった。「五様式体系」では、最後の弥生土器は「第五様式」。古墳時代の赤焼け土器は「布留式」（末永雅雄・小林行雄・中村春寿「大和における土師器住

居趾の新例」『考古学第九卷第一〇号』一九三八年）と呼ばれる。田中は、布留式以前、かつ第五様式以降に位置すべき土器の存在を紹介。指標となる土器が大坂府豊中市庄内で発見されたので、「庄内式」と名付けられた。

「第五様式」は、器種は長頸壺・器台が顕著。甕の外面は粗いタタキ目、平底が特徴。一方、「布留式」は、器種は甕が顕著。その外面は刷毛目、内面は篋削り。器形は丸い胴部、口縁端部の肥厚、丸底が特徴。「庄内式」は、型式的にも、両者の中間的特徴をもつ。甕の外面は細かいタタキ、内面篋削り、尖底、口縁端部上方への拡張等。

第五様式は前方後円墳の出現前、布留式は出現後の土器。庄内式は、その帰属をめぐって論議が百出し始めた。特に、最古の本格的な前方後円墳（奈良県箸墓古墳）との関係は注目されるところ。今日、庄内式を、最新の弥生土器と認める見解と、最古の土師器と認める見解が錯綜している。その後、都出比呂志は、おおむね「庄内式」土器の時代を「第六様式」と再定義し、今日に至っている。

昔話

清野謙次「弥生式土器は伊予国温泉郡で発見したのを曾つて東京人類学会誌上で報告せられましたし、九州地方にも存在して居るのが発見せられましたから、備前、備中でもあるに相違ないと思つて居ましたが果して発見いたしました。（備前国にて発見せし弥生式土器『考古学』五―八）一九〇五年）

岡山の昔話をする。一九〇四・五（明治三七・八）年のこと。岡山市生まれの清野謙次は、中学生の頃から考古学に興味を持ち遺跡捜査を続けていた。備

前国上道郡澤田村の東南に金蔵山から東に続く、海拔一三八メートルの山の頂上下や斜面下で、この地方で最初の弥生土器を発見した。破片は約一五〇個。表面は全て「朱」が塗られ、篋の跡や刷毛目も見られた。土器の縁部に「三角紋様」が多く、「平行せる平行直線・傾斜せる平行直線・此傾斜線が両方より入り交じって出来た所の菱形紋様、ミの字繋ぎ」もあった。腹部には、「斜線若しくは反対の斜線が組み合わさった稍やなめの井の字紋様」もあった。全体の形は確認できないが、形状は複雑・奇妙。壺形・台にすかしのある高坏形・穴のあいた皿形のものがある。等々。とにかく、特殊な土器の発見であった。

特殊

近藤義郎・春成秀爾「弥生時代後期の立坂出土の特殊器台形土器から都月一号墳の円筒埴輪にいたる系譜関係の存在を確信し、変遷のおよその輪郭をえがきうるようになった。（埴輪の起源）『考古学研究』第一三―三）一九六七年）

櫛目紋土器の出現は畿内政権の誕生と結び付き難いが、特殊器台・特殊壺の出現は吉備勢力の誕生と結び付き易い。理屈上、弥生時代に土師器は存在せず、古墳時代に弥生土器は存在しない。弥生時代に古墳は存在せず、古墳時代に弥生墳丘墓はない。円筒埴輪や壺形埴輪はどうか。理屈上、弥生時代に存在することはない。

この問題の究明に先鞭をつけたのは、一九六七年、岡山大学の近藤義郎・春成秀爾であった。弥生後期の吉備に「特殊器台・特殊壺」が出現し、これが古墳時代の円筒埴輪・壺形埴輪の「祖型」であると明言。特殊器台・特殊壺は、

「立坂型→向木見型→宮山型→都月型」と変遷し、最後の都月型はもはや弥生時代の特殊器台でなく、「初源的な円筒埴輪」と評価された。都月型の壺形土器は、立坂→宮山型の特殊壺とは顕著に差があり、畿内における「布留式」の壺形埴輪に近似する。

以降、近藤は、吉備の社会的・政治的構造を明らかにすべく、固有の弥生墳丘墓と特殊器台・特殊壺に焦点を合わせ、各所の墳丘墓や前方後円墳を精力的に調査。ついに岡山県橋本（一九七六～八六年）で巨大な「弥生墳丘墓」を発掘、その政治的存在物としての実態を浮かび上がらせた。同時に、弥生墳丘墓と前方後円墳との関係性・相違性を明言すると共に、前方後円墳出現過程の究明に重要な諸認識を創り上げていくことになる。

なお、中村春寿「桜井茶臼山古墳」（一九六一年）、梅原末治「椿井大塚山古墳」（一九六四年）、中村春寿他「大市墓の出土品」（一九七六年）、石野博信他「纏向」（一九七六年）等で、畿内の古墳出現期の実情が明らかになり始めた。最古の前方後円墳に位置づけられる箸墓には、都月型特殊器台の存在するといふ（春成秀爾他「箸墓古墳の再検討」一九八四年）。一九六〇年代には、「庄内式」土器と「特殊器台・特殊壺」という、前方後円墳出現過程に関する調査・研究が目立ったのが特徴。

戦争

金閣怒一あの時は戦争でした。出来るだけのことをやらなければ、と、穴の中で土器をとりあげたり、図面を作るのに必死でした。そこへブルドーザーが迫ってくる。（「弥生文化の研究一〇」一九八八年）

一九六〇年代中頃～八〇年代中頃迄の状況を「戦争」と語る考古学者は多い。

列島開発の嵐が原因となり、各地で多数の大規模な弥生集落が発掘された。山口県綾羅木郷（一九六九年）、兵庫県田能（一九六六年）、岡山県津島（一九六八年）、兵庫県大中（一九六二年）等を先陣に、佐賀県二塚山（一九七四年）同袖比（一九七七年）、福岡県三雲（一九七四年）、山口県綾羅木郷、鳥取県青木（一九七一年）、同長瀬高浜（一九七七年）、岡山県百間川（一九七六年）、同・用木山（一九七二年）、大阪府観音寺山（一九六八年）、同池上・四ツ池（一九六九年）、同瓜生堂（一九七一年）、滋賀県服部（一九七五年）、三重県納所（一九七三年）、神奈川県大塚（一九七二年）他、多数。全国各地は枚挙なき「戦争」状態であった。

同時に、集落遺跡中央の発掘も急増。出土土器は従来とは桁違い。池上では、遺跡全体の数十分の一の発掘で、百トンとも噂される弥生時代の遺物が出土。この状況は、唐古・田能・鬼虎川・亀井・瓜生堂・安満等、畿内の拠点集落でも大同小異。別に、北部九州の墓地遺跡でも、金隈・須玖岡本・吉武高木・立岩・宇木汲田等、数百～数千基の甕棺墓等が発掘される事態が急増。従来の発掘や遺物整理体制では、はなはだ対処不可能な状態になった。その究極は、今日、有名な佐賀県吉野ヶ里遺跡である。甕棺だけで三〇〇〇基を超えるという。この頃である。この頃、発掘された大規模な弥生遺跡は、いわゆる「拠点集落」と呼ばれる（各地域の核となる、継続的で大規模な弥生集落遺跡）が多数を占めていた。

同時に、製作技術を意識した土器個々の観察は丁寧になり、一個毎に詳細な「観察表」が作られることも生じた。器種・型式・法量・成形・調整・紋様・胎土・色調・焼成・黒斑・出土地点等。それに合わせ微妙な調整痕すら、実測図に描かれ始めた。一個の弥生土器を実測するのに、丸一日かかることも通例。一日一〇個も二〇個も全国各地を実測して廻った「弥生式土器聚成図録」の時

代とは、明らかに異なってきた。

私体験

当時の私体験を語る。一九六九年二月から、水野清一・小林行雄・坪井清足・金関恕・佐原真らの指導により、大阪府池上・四ツ池遺跡の発掘が開始された。発掘だけで三年以上、遺物整理を含めると五年以上が予定された。私も学生補助員として参加。後日、卒業後もそこに就職？し、山のような弥生土器と拠点集落の実態を眼のあたりにする。私は卒論テーマを、当時ブームとなっていた「Alutitudinal Settlement」（高地性集落）と設定。「紫雲出」は既に、考古学の教科書になっていた。先ず「紫雲出詣」に行こう。

一九六九年の晩秋、リュック・寝袋で、平川清式と私は紫雲出山に登り始めた。夕焼の瀬戸内海が眼下にあった。直ちに夜となった。満天の星。頂上近く、サラサラと水音を聞いたのは、淋しさ故の幻想だったのかもしれない。意外にも、頂上に灯燈る人家があった。「今晚は。庭にテントを張ってもいいですか」。「そんなことをしないで、わが家に泊まりなさい」。「有難うございます」。温かな家庭が高地性集落にあった。明朝、佐原が土器製作技術論を展開した弥生土器が眼前にあった。こうして私達の旅は、温かな人情に触れることから始まった。頂上の無人建物が荒らされたと新聞報道されたのは、それから何年も後のこと。かの主人が紫雲出の発掘に貢献した「前田雄三」だったことをその時に知った。年がいてもなく涙が零れた。

紫雲出を去り、四国・九州と流れて、山口県下関に到着。福岡県前原町の原田大六を訪問した話は、長くなるので省略する。否、誰にも見せないという平原の大鏡群を、原田の講義を聴き実見したことだけを紹介しておく。当日、弥生文化発祥の地・糸島は、大雪であった。平川の故郷は、山口県と福岡県の境

目・彦島であった。三月以来、緊急事態が発生していた綾羅木郷遺跡を訪問したのは当然のこと。既に話は金関恕から聞いていた。無数の貯蔵穴が累積する広大な遺跡は、まさに「戦争状態」であった。資料館に集められていた綾羅木の弥生土器は、かの遠賀川遺跡の有紋土器に似ていたが、本場＝板付遺跡等の土器とは異なっていた。先の言葉は、その発掘を担当した金関の懐古談である。ベトナム戦争が綾羅木にまで及んでいた。私は後日、金関から「イスラエル方式」の発掘を身を以て教えられることになる。

長靴

奈良国立文化財研究所所員組合―それにも拘らず、文化庁のいう「遺跡保存のための資料を得る調査」という強い要請によって私たちは本意ながら調査に参加せざるを得ませんでした。（津島遺跡保存に関する声明）『考古学研究一六一―一九六九年』

旅は続いた。綾羅木郷を去り、吉備の中心・岡山県津島遺跡に到着した時には、長旅の疲れは蓄積していた。再び眼前には戦争状態があった。「史跡指定か武道館か」をめぐる緊急発掘の最中。コンクリート製パイルの林をぬって、弥生遺跡の発掘がヘドロ中で進行していた。低湿地は弥生水田。前の台地上が住居域とのこと。そこには、なぜか奈文研・佐原の長靴姿があった。私が、佐原の長靴姿を見たのはこれが最初。否、兵庫県田能遺跡が最初であったかも知れない。確実なのは、最後であったこと。この津島には考古学研究会の本拠・岡山大学が所在する。後日、私は、考古学研究会の主催者・近藤義郎や高校時代の恩師・佐川某氏の友人である都出比呂志の学恩を得て、「石包丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」（一九七四年）と題する論文執筆で、考古学の世

考古学エレジー（中原齊氏教示）

- | | |
|--|---|
| <p>1 求め求めて流れゆく
旅路の果ては知らねども
我青春のこのさすらいを
愁いを込めて詩うかな</p> <p>3 何を求めてゆくのやら
遺跡に向かうこの俺は
若い命の灯かがげて
ひたすら歩むこの道を</p> <p>5 あの娘は良家のお嬢さん
おいらはしがない考古学徒
どうせかなわぬ恋ならば
トレンチ掘って忘れよう</p> <p>7 発掘終われば俺達にや
明日は別れが待っている
せめて今宵は飲み明かそうぜ
青い月夜の白むまで</p> <p>9 長い旅路のその果てに
求めしものがあるのやら
虚しさ乗せて夜風が渡る
星降る夜のトレンチに</p> | <p>2 町を離れて野に山に
遺跡求めてゆく俺は
夕辺の星見てほのぼの偲ぶ
遠い昔の物語</p> <p>4 あの娘を残して旅の空
流れる雲のそのように
今この遺跡にたたずめば
遙かなあの娘が偲ばれる</p> <p>6 雪の山野に陽は落ちて
月の光に照らされる
遺跡の白く清けきば
あの娘の面を偲ばせる</p> <p>8 何を求めて来たのやら
発掘終わって虚しさに
耐えかね呼んでみたあの娘の名前を
切なく響く夜の中</p> <p>10 真を求めて何時の日も
苦しきことのみ多かれど
変わらぬ愛の情熱で
命の限り求めゆく</p> |
|--|---|

（註）1970年代になると国学院大学の若き考古学徒達は、こうしたエレジーを歌い始めました。

界へ参入させていただくことになる。

生産地

佐原真一 生駒山西麓地帯は、すぐれた土器の生産地として名高かったに違いなく、製品は遠近の地に大量に運ばれている。（『弥生土器』一 九七六年）

この頃、弥生土器の地域性が論議の中心であった。弥生土器個々を製作技術に着目し観察すると、同時代でも製作技術が異なる土器、つまり生産地の異なる土器を発見できる。一九七〇年前後から佐原は、籐杖文等に飾られたチヨコレート色を呈する独特の生駒西麓（河内）産の土器に着目。同時に、紀伊・和泉・大和・摂津・山城・近江・播磨等、旧国単位の弥生土器を識別し始めていた。河内産は、器形・紋様・胎土・色調等の点で、明確に他地域産と異なる。この特性は、各遺跡で搬入率を算出し易い等の条件にある。また河内産と類似しても、胎土が異なる土器もある。かかる観点等から、遺跡毎の観察・分析によつて、地域間や集落間関係の追求が可能となった。従来の様式論は時代分析に主体があつたが、佐原による地域性概念の導入で、更に空間分析にも有効性を発揮できるようになった。小林様式論は小林・佐原様式論へと脱皮した。

制覇

編者一とところで、ふたりでやってきた『弥生文化の研究』もいよいよおしまいです。これも戦争でしたネ。（佐原真・金閔恕『弥生文化の研究一〇』（一九八八年）

『弥生式土器集成 本編二』（一九六八年）から、佐原真・金関恕編『弥生文化の研究』（全一〇巻）完結の一九八八年迄の二〇年間は、大規模発掘が実施された戦争で時代であると同時に、今日の弥生研究本体が形成された時代でもある。金関と佐原は、各地の新たな発掘成果による弥生研究を総合すべく、『弥生文化の研究全一〇巻』を刊行。その実現に、各地で調査を担当した若き研究者を動員した。一九六〇年代の佐原はまだ実感はなかったが、『弥生文化の研究』や『考古学ジャーナル七六〜二一九』（一九七二〜八三年）を刊行する時点で各地の弥生土器の平行関係を把握すべき必然性を実感。「全国五期体系」の構築を決心した。「全国五期体系」は、小林の「唐古五様式体系」と小林・佐原の「畿内五様式体系」等を根幹に、各地の多様な土器型式を平行させたもの。両書刊行に各地の研究者が動員された故、「五様式体系」は全国的に浸透するはずだったが、一九九五年現在、佐原が指揮する以外の場では、日常的に利用されている気配はない。

コロニー

三辻利一「無文土器が朝鮮半島産かどうかも現在の段階ではなんとも言えない。（『無文土器と弥生土器の胎土分析』『三国の鼻遺跡Ⅲ』一九八八年）

北部九州はさすがに中国・大陸朝鮮半島に近い。佐原が弥生土器の製作技術論を展開していた頃、北部九州では別の製作技術論が展開し始めた。永く弥生文化の原点たる名声を保持していた板付遺跡では、周辺の開発が進行。近くの諸岡遺跡も発掘された。ここでは、弥生前期末に属する一七基の堅穴のうち、一一基から弥生土器とは器形や製作技術を異にする、いわゆる朝鮮無紋系土器

が出土（『福岡市埋蔵文化財調査報告三二』一九七五年）。既に佐賀県土生遺跡（土生遺跡発掘調査委員会『土生遺跡発掘調査概報』一九七二年）等で類例は知られていたが、諸岡遺跡の担当者・後藤直が朝鮮考古学が専門だったこともあり、その報告の反応が大きかった。後藤は、朝鮮半島と国内の無紋土器との関係を論議（『朝鮮系無紋土器』『三上次男博士頌寿記念東洋史・考古学論集』一九七九年）し、朝鮮半島と弥生文化との関係を、土器論によって追求できる可能性を提言した。

その後、弥生前期末頃の無紋土器は、北部九州はもとより、関西にまで類例は増加し、研究も進展した（藤口健二「朝鮮無文土器と弥生土器」『弥生文化の研究三』一九八六・片岡宏二「日本出土の無文土器系土器」『日韓交渉の考古学』一九九一年）。一九八八年、福岡県三国ヶ鼻遺跡で、貯蔵穴・住居址・溝等から百個体を大きく超える各種の無紋土器が出土（『三国の鼻遺跡Ⅲ』一九八八年）。その出土場所が集落全体の特定地点に限定されることから、半島住人のコロニーたる可能性も考慮され、朝鮮系無紋土器が集落構成論においても重要な役割を果たすようになってきた。

九州男児

佐原真「私は縄紋農耕の存在した可能性があると思うんです。いろいろひどい議論もあっていままでも意識的に否定的立場をとってはきましましただけだ。（『農耕のはじまりをめぐる』『歴史公論』一九七八年）

佐原真は関東系関西人であって、九州男児ではない。近年、九州男児（山崎純男・橋口達也・中島直幸）らの活躍は目覚ましい。新たな展開が彼らの発掘で実現することも度々。佐原が言うように、一九七八年迄、「縄紋晩期農耕論」

は否定的であった。「弥生早期論」も関係資料は急増していたが、研究は停滞していた。あくまで「板付一式」が最古の弥生土器であった。そして、次の三点の事実は既に知られていた。

- 一、九州の縄紋晩期土器は、黒川式↓山の寺式↓夜白↓板付一式と移行すること、
- 二、縄紋最終の夜白式は、弥生初頭の板付一式土器と共存する例があること、
- 三、黒川式・山の寺式・夜白式・板付一式に粘痕土器が存在すること。

夜白式と板付一式は共存しても、前者は「縄紋土器」、後者は「弥生土器」であった。型式学的に深鉢(甕)は、黒川式↓山の寺式↓夜白式↓板付一式と連続するが、夜白式は縄文土器、板付一式は弥生土器。両者に決定的な区別があった。いかに稲籾・粘痕土器が発見されても縄紋土器は縄紋土器であった。縄文晩期には食料生産を基盤とする生活が未確立であったと評価された。かつて、夜白式土器は従来の縄紋人が、板付一式は渡来人が製作したような認識も暗黙にあった。

一九七九年、福岡県板付遺跡で、夜白式土器を伴って水田が発見された。弥生文化を象徴する石包丁・ジャポニカ種米・木製農耕具も出土。水路・堰も発見された。いわゆる「縄紋晩期」水田の存在が確認されたのである。担当者は福岡市教育委員会の山崎純男。山崎は、自ら縄紋水田を発掘する直前まで「縄紋晩期水稲農耕否定論者」であつたらしい(「縄紋農耕論の現状」(『歴史公論』一九七八年)。

快進撃

佐原真一初期稲作文化の土器を弥生土器とよぶ定義による限り、佐賀県菜畑、福岡県曲り田、同板付下層の「山ノ寺式土器」や「夜白式土器」など、従来の「晩期縄紋土器」は早期(先一期)の弥生土器に転属となる。(『総説』「弥生文化の研究三」一九八六年)

九州男児の快進撃が続く。中島直幸は一九八〇年、佐賀県菜畑遺跡で、縄文晩期後半〜末(山の寺)夜白式の水田を発掘。同じく橋口達也は同年、福岡県曲り田遺跡で晩期後半〜末(山の寺)夜白式)の住居群を発掘。これら板付・菜畑・曲り田遺跡は、従来の縄文晩期後半〜末が、弥生時代に組み込まれるべき実情を明示した。新しい状況に対し、時代枠組みに関して、次の三つの選択を迫られることになった。

- a案 縄紋晩期後半Ⅱ「山の寺」夜白式」を「弥生前期」に組み込む案。これだと、従来の縄文晩期が半分となり、逆には弥生前期が前に拡大されることになる。
- b案 弥生前期に先行して「弥生早期」を新たに設定する案。これも同様に、縄文晩期は半分に短縮されるが、弥生前期には変更はない。
- c案 縄紋晩期に稲作農業が存在した事実を認めても、縄文晩期も弥生前期も従来のままとし、時代枠組を基本的に変更しない案である。

新たな実情を踏まえて、橋口達也と佐原真一は、縄紋晩期後半〜末を、「弥生早期Ⅱ先一期」に変更すべき見解Ⅱb案を強く提唱。だが、「弥生土器の様式

と編年』(一九八九・一九九〇・一九九二年)等、縄紋水田発見以降も、時代枠組を変更しないc案の支持者も多い。a案の提唱者は見当たらない。同じb案でも、「弥生早期」の設定を、北部九州に限定する見解や \parallel a一案や、それ以东の中国・四国まで(a二案)・畿内まで(a三案)・中部・北陸まで(a四案)等、どこまでに適応するかによって見解は分かれてくる。

各地はどうか。突帯紋土器の時代に、弥生文化の構成要素が断片的に確認され始めた。粉痕を有する突帯紋土器は、既に瀬戸内海沿岸各地で知られていた。そして一九八五年、大阪府牟礼遺跡で水路と堰、一九八六年に岡山県江道で水田、兵庫県口酒井遺跡で石包丁が出土。

うかつであった

武末純一「弥生時代の人々が文字を知っていた可能性を、とくに茶戸里一号墳と平行する弥生時代中期後半を中心に考えてみよう。(「弥生中期の人々と文字」『西日本文化三〇〇』一九九四年)

考古学が人類史の研究に努める限り、年代の問題は重要である。考古学の年代には、実年代に加えて、様々な暦年代・絶対年代・相対年代等がある。実年代とは、モノ・コト個々が実際に発生した絶対的時間(時点)のこと。そうした実年代すべては何人にも不明。かつ表現不能。モノ・コト個々の時点は、暦年代・絶対年代・相対年代で推定・代用して表現することになる。別に「虚時間」(ホーキング)という概念もあるらしいが、これは宇宙と神に関する時間概念。考古学とは無縁である。

暦年代とは、文字とおり、暦による年代のこと。邪馬台国論争のキーワードは「景初三年」。暦年代には各種がある。シリア・パルミラ碑文は「セレウコ

ス暦(紀元前三二二年一〇月から始まる)」で表記。表記される数字から三二一か三二二を引算し、西暦に換算する。暦使用の実態が不明の弥生文化と、暦の使用が明確な中国文化が隣在する。「景初三年」はもちろん中国の暦年。「何年何月何日」と明記された弥生土器の発見が切望される。遺憾ながら、実例は皆無である。

次善の策に、暦年代が推定される弥生土器の発見に期待がかかる。幸運にも、北部九州では甕棺に中国鏡等が副葬される。仮に中国鏡の製作年代が明確で、製作直後に伝来し、直ちに副葬されたとすると、甕棺の年代が推定されることになる。だが、鏡の製作年代・伝来までの年代・副葬までの年代等は正確には不明。製作―伝来―副葬の各過程に時間的経過が想定される。各過程にいくかなる年数を想定するかで、甕棺の年代観に大きなブレが発生する。北部九州の国王達は、先進国・中国の権力者と関係しながら、なぜ墳墓に被葬者名や造墓年月日を書き残さなかったのだろうか。かの甕棺王国に、しかるべき書記はいなかったのか。今日の弥生研究者にとって、彼らの行動は極めて「うかつ」であった。

変更

佐原真一「弥生時代については、先I期、およびIⅤV期に区分する原則にしたがい、先I期Ⅱ前五Ⅴ前四世紀 I期Ⅱ前四世紀Ⅲ前三世紀 II期Ⅱ前二世紀 III期Ⅱ前一世紀 IV期Ⅱ一世紀 VⅡ二Ⅲ三世紀」とおさえて、世紀で表現した。(『人間の美術二』一九九〇年)

弥生土器の年代観は、中国鏡や貨泉等との伴出関係から推定されるのが通例。一九五〇年代の杉原モデル(『日本考古学講座四』一九五五年)では、前期・

板付式の始まりを紀元前二〇〇〜三〇〇年、中期の須玖二式を前一世紀後半から後一世紀前半、後期の終わりを紀元後三〇〇〜四〇〇年と概算。弥生時代の始終年代に地方差があると考えた。

一九六〇年の田辺・佐原モデル（『日本考古学Ⅲ』一九六七年）では、前期Ⅱ第一様式、中期Ⅱ二〜四様式、後期Ⅱ五様式という「小林モデル」を踏襲し、新たに一様式を古・中・新段階、三様式は古・新段階に細区分した。そして、その体系に年代を与えた。内容は、一様式（新）段階は紀元前二〇八年の直後、二様式から三様式（古）段階を一世紀の中頃、中期中葉を一〇〇年前後、三様式（新）段階から四様式を二世紀前半〜後半、四様式末を一八〇年前後、そして五様式は一八〇年頃から三〇〇年の直前としていた。

この前年。中国科学院考古研究所は「洛陽燒溝漢墓」（一九五九年）を刊行。弥生土器の年代観に重要な影響を与え始めた。弥生時代に平行する洛陽燒溝漢墓群は、同時に、北部九州の甕棺と共通する鏡等の副葬品がある。従って、前者の年代観が後者に有効な情報を提供する。橋口達也は、北部九州における甕棺研究を総括。大型甕棺をKⅠ〜V期に大別すると共に、計一八型式に細別した。副葬品から暦年代が推定される洛陽燒溝漢墓との関係から、Ⅱa式は紀元前一〇八〜六五年、Ⅲb式は前六四〜三三年、Ⅲc式は前三二〜紀元後六年、Ⅳa式は後七〜三九年、という年代観を与えた。Ⅰ（a〜c）式Ⅱ弥生前期、Ⅱ（a〜c）式Ⅱ中期前半、Ⅲ（a〜c）式Ⅱ中期後半、Ⅳ（a〜e）式Ⅱ後期前半、そしてⅤ（a〜e）式Ⅱ後期後半。北部九州と関西、関西と関東、関東と東北等、各地方の時代区分と時間的平行関係の把握は難しいが、この橋口モデルは、従来の弥生時代全体の年代観に大きな変更を迫ることになった。

判明

中村純一大変おくれましたが、菜畑遺跡のC-1 dating結果が最近判明しましたのでお知らせします。「C年代測定の追加資料について」『菜畑』一九八二年）

地区	層位	時期	土器型式	C ¹⁴ -dating
H-I-4	8上層	弥生前期初頭	夜白・板付Ⅰ式共伴	2960 ± 90 (N-4599)
H-I-4	8下層	縄紋晩期終末	夜白式単純	3230 ± 100 (N-4600)
H-I-4	12層	縄紋晩期後半	山の寺式	4030 ± 65 (N-4598)

弥生時代の年代観に関しては、科学的な年代測定法にも期待がかかる。中村による菜畑遺跡の年代測定では、弥生早期Ⅱ先Ⅰ期（縄紋晩期）の山の寺式Ⅱ紀元前二〇〇年前後、同夜白式Ⅱ紀元前一二〇〇年前後、弥生前期の板付Ⅱ式Ⅱ紀元前一〇〇〇年前後という結果が提出された。そうした数値は、弥生早期を紀元前五〜四世紀前後と推定する考古学で見解とはかなり異なる。文科系考古学と理科系考古学とのギャップである。

最古

橋口達也―最も古く位置付けられるものは四五号墓副葬壺である。（「結語」『新町遺跡』一九八七年）

弥生早期の曲り田や新町遺跡を発掘した橋口達也は、再び決断した。弥生早期でも、曲り田（古）式は、最古の弥生土器。例えば、新町遺跡の四五号墓に副葬された小型壺は、小形壺の中の最古と指摘。直立する頸部。わずかに外反する口唇部。丸底に近い平底を呈する。では、こうした小形壺の祖形は、いずこに求められるのか。朝鮮半島で優れた研究が進行しつつある（例えば、安在皓・後藤直訳「松菊里類型の検討」『古文化論叢三二』一九九三年）。

みちのく

村越潔一世間には意図せず、偶然なるチャンスに恵まれて思わぬ発見をなす時もあるし、地道な研究の積み重ねによって、ようやく目的を達するという場合もある。垂柳遺跡は、まさしくこの両方を兼ね備えたものといえるだろう。（序）『垂柳遺跡』一九八五年）

近年、みちのく研究者の活躍も目覚ましい。東北でも新発見が続出。一九八一年、青森県垂柳遺跡の試掘（青森県教委）で、中期初頭の田舎館式土器を伴う水田を発見、二年間の発掘で六五六枚の水田が発掘された。一九八四年～一九八八年、青森県砂沢遺跡の発掘（弘前市教委）で、今度は弥生前期の砂沢式土器と遠賀川式土器を伴う六枚の水田を発掘。一九八七年、秋田県地蔵田B遺跡で、遠賀川式土器を伴い、六四×五〇メートルを測る円形柵囲い住居群と墓地が発掘された（秋田市教委）。

遠賀川式土器の存在は、既に青森県松石橋（市川金丸他一九八四年）や山形県生石遺跡（須藤隆一九八三年）等で知られていた。だが、東北の弥生前期に、本格的な水田経営を指摘する声はなかった。「弥生文化が、東北地方で受容されたのはその中期の時期であり、全国的な時期区分での前期の文化は波及

していない」（伊藤玄三「東北」『日本考古学Ⅲ』一九六七年）が常識であった。寒冷な気候条件や歴史展開を考慮すれば、当然のこと。一九六〇年代では、関東地方すら、中期から弥生時代の解説される実情にあった（神沢勇一「関東」同）。否、一九八〇年の直前まで、中部地方すら、「弥生文化が東日本へ最初に波及しはじめたのは、ちょうど西日本で櫛描紋土器が出現した中期初め頃にあたる」（工業普通「弥生土器」一九七九年）が常識であった。

新発見は、従来の弥生文化伝播モデル、例えば「杉原モデル」（『日本農耕社会の形成』一九七七年）に重大な変更をもたらした。田舎館式に炭化米を発見した伊藤信雄（一九五七年）。遡れば舩形囲式に靱痕土器を発見した山内清男（一九二四年）。地元研究者による積年の努力と暗黙の願望が実現した。その後、西日本の遠賀川式土器を熟知した佐原真・工業普通は、地元研究者の協力を受け、みちのくの遠賀川式土器を追求する作業も展開（佐原真一九八六年）。当地の弥生前期Ⅱ砂沢式が、二・三条の篋描き沈線紋が多いこと、沈線紋間に横長列点紋を加えるものが多いこと、沈線紋帯間に縦方向の二・三本の沈線を加えるものがあること等から、第一様式でも中段階に相当する土器と判断している（佐原真一九八七年）。

援助

アノルドー彼女の忍耐と愛と援助と献身がそれを可能とした。（『土器理論と文化プロセス』一九八五年）

近年、優秀なる弥生研究者は、なぜかケンブリッジに留学する。都出比呂志（大阪大学）・藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館）・溝口優司（九州大学）・宇野隆夫（富山大学）等々。否、縄紋研究者の小林達夫（国学院大学）も同様で

ある。

あなたが先進的な土器研究者なら、アメリカ・イリノイ大学のアノルドを熟知のはず。近年、土器研究のバイブルと言えば、彼の論文「土器理論と文化プロセス」(一九八五年)を指す。メキシコ・ペルー・ガテマラでのエスノ・アーケオロジーと、世界各地の土器生産に関するデータから、土器生産の起源や展開プロセスのモデル構築を試みたもの。バイブル完成には、彼女・ジェーンの存在が不可欠であった。弥生学徒も間接的恩恵を拝受。彼女に感謝。そこでは、一般システム理論・文化生態学・空間分析・人間行動学等、学際的な認識や分析法を採用。冒頭で紹介した中園論文のキーワード「モーター・ハビット・パターン」も重要な役割を果たしている。

目標は、現在における土器生産の実情を把握し、過去の土器生産に対する認識を促進すること。については二つの道筋を設定。第一は、土器生産に関する人間行動に焦点を当て、土器製作地と諸材料(粘土・混和材・上薬・燃料)調達地、および土器製作地と供給範囲等の距離関係を測定。この道筋は、セトルメント・アーケオロジーにおけるサイト・キャッチメント・アナリシスの現代版として評価できる。土器の運搬方法や範囲も調査。第二の道筋は、土器生産の実情を規定する様々な条件(環境・生業・技術・定住性・需要・人間と土地の関係等)を考慮し、土器生産の起源や発展過程等に関する一般モデルを構築。そこでは、変化のメカニズムを説明する一般システム理論が重要な役割を果たす。

結果は、すべて豊富な図表として明示。要約された諸理論、類型化された人間行動、的確な資源・環境に対する認識、明快な空間分析の図表、整備された論文リスト等。ざっと参照するだけで、弥生土器研究の援助となる。全体の構成をざっと紹介しておく。

- 一 序文―土器理論・土器研究のパラダイム・理論的展望・理論序説
- 二 資源―資源の特質・資源との距離・利用圏モデルと土器材料・考古学との関係
- 三 気候と環境―気候と調整機構としての環境・気候と逸脱増幅機構としての環境・考古学への応用：中央アンデス・要約・他の循環機構との相互関係：資源・結論
- 四 葛藤の調整
- 五 定住性の程度
- 六 需要―粘土容器の技術的特性・土器需要に影響する実的要因・需要に影響する非実的要因・他の循環機構との関係
- 七 人間と土地の関係―土器作りと人口圧・人口圧と社会構成の関係・資源との関係・需要との関係
- 八 技術開発―技術開発のプロセス・技術開発と文化変容に対する障害
- 九 結論―考古学との関係

証言

小林正史―考古学者は、薪と土器を用いた煮沸といった伝統的生活技術の経験がほとんどないため、伝統的技術の優れた面に気づかない場合も多い。(『民族考古学から見た土器の用途推定』『新視点・日本の歴史』一九九三年)

近年、エスノ・アーケオロジー(民族考古学)が活発である。考古学者は通例、土器や石器、住居址や墳墓等、いわゆるモノⅡ考古資料を観察し、過去の人間行動や文化や社会等の復元に努める。従って、モノの背後に存在するヒト

「人間を積極的には意識しない態度をとる。エスノ・アーケオロジとは、考古学者が、文化人類学者のように、伝統文化を保有する住民と共住しながら生活ぶりを観察。モノとヒトがいかに連結しているかを研究するもの。目的は、得た様々な情報を、考古学本来の研究に役立てること。そもそも、考古学的研究だけでは、過去の復元は難しい。

例えば土器製作者は、各器種の製作法・用途・特性・使用法・名称を熟知、紋様や彩色の意味も理解していることが多い。更に、土器に関する神話や精霊に関する伝承も受け継いでいるだろう。「弥生人は土器を一日で何個ぐらい作ったか?」「この煮沸用甕はおかず用か、ご飯用か?」の質問には、考古学者は答えられない。仮に答えるとしても、「わからない」というのが本音である。

「弥生人は一度に何個ぐらいの土器を運搬したのか?」の質問に対しても同様。博物館の仰々しい展示物品を見ると、一個でも運び難いと思うのが関の山である。こうした時、エスノ・アーケオロジでの情報が参考となる。

アリゾナ大学でロンゲー・エーカーらに考古学を学び、フィリピンでカリソガの土器作りを研究する小林正史なら、次のように明言するだろう。「ご飯用はおかず用に比べ、頸部のくびれが強く、器高が高く、口頸部が垂直に近く、蓋を用いる等の特徴を持つのが一般的だろう」と。「稲作農耕民の弥生人は、フルタイムなら一日に一〇個以上、パートタイムなら一〇個以下を作っただろう」と。アノルドなら、「一回で数一〇個の土器を背負って運んだに違いない」と。

フィリピンのある土器作り村のこと。作り手が全員女性なのに、一人の若い男性が恥ずかしそうに、弥生時代の「杵」状道具で粘土を砕いている姿を発見した。理由を聞こうとしたが、私はタガログ語ができないので断念。「まあ、頑張りなさい」と声なき声をかけた。同様に、女性達にも道具類の名称や苦労話を聞けなかった。エスノ・アーケオロジには、現地の人達とのコミュニ

ケーションする能力が不可欠である。

近年、この世界に、奈良教育大学の脇田宗孝（弥生土器の造形美と技法に関する考察）『大阪美術教育学会誌二六（一九九四年）』や大阪芸術大学の福本敏樹（「精霊と土と炎」一九九四年）等、民族造形学者達が積極的に登場し始めた。彼らは、考古学者に欠落する芸術学的観点からも、土器研究を展開する能力も具備。エスノ・アーケオロジ的手法で活躍中の考古学者（小林正史一九九三年・青柳洋治一九八二年・西谷大一九九一年・瀬川芳則一九八三年・中村浩一九八二年、他）と競争を開始。今後の成果に期待がかかる。

一九九五年

近頃、発掘調査の現場に高級車が群れをなしているが、弥生土器研究はやや停滞気味である。（一九九五年某日稿了）

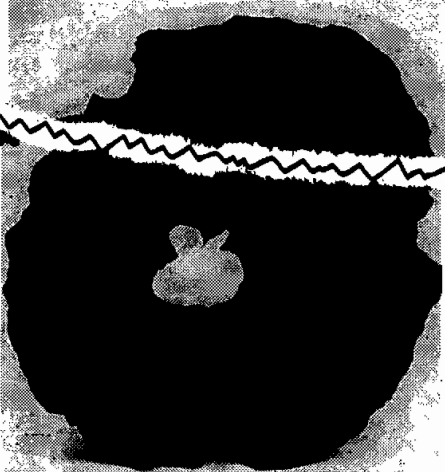
弥生の始まりもっと古い？



出土した大型遺物跡。柱穴に柱の根元が埋まっていた。写真提供・奈良国立文化財研究所。98年8月、兵庫県尼崎市武庫之荘本町2丁目

朝日新聞
2000年4月26日

土器式より古い紀元前245年



柱の切断面。右上のやや黒ずんだ部分が辺材。写真提供・奈良国立文化財研究所

兵庫県尼崎市武庫之荘本町の「武庫庄遺跡」で、一九九六年に見つかった大型建物跡の柱の年輪を年代法で調べた結果、紀元前二四五年ごろに伐採されたヒノキだったことが二十五日、奈良国立文化財研究所の調査で分かった。一緒に出土した土器の様式は、紀元前一世紀の弥生時代中期基本となっている。考古学の年も古いことがわかり、「ものさし」の異変が迫られそうだ。

尼崎の遺跡・奈文研測定

科学的な年代測定法として欧米で開発された年輪年代法は、一年に一層ずつ出来る年輪がその年の気候を反映して幅が異なるのを利用する。現代から原始時代までさかのぼる暦年の標準パターンを樹種ごとに作り、これに年代不明の木の年輪パターンを照合して、一番外側の年輪の年代を特定する方法だ。

測定した柱は年輪が六百十七ある老木で、直径五十六センチ、長さ七十五センチ。大型建物跡の柱穴に残っていた。尼崎市教委の依頼で、調査に当たった同研究所の光谷拓実・発掘技術研究室長は当初、樹皮のすぐ内側の辺材部分が確認できず、削られたと判断。その部分の厚みを、七十七年分と推定する。早期、前期、中期、後期の四つに分ける。

弥生時代の区分一般的に、出土する土器の様式や、一緒に出土する中国の銅鏡などを基準に年代を推定する。早期、前期、中期、後期の四つに分ける。

定して伐採年を紀元前二六八年ごろとしていた。しかし、尼崎市教委の許可を得て、同じ柱を輪切りにして再調査したところ、幅二・六センチの辺材部分が識別でき、この年輪パターンを年輪年代法で調べた結果、原木の伐採年を「紀元前二四五年に限りなく近い」と結論つけた。

この結果、紀元前一世紀とされる弥生時代中期ごろは、紀元前三世紀を始まりとする見方も可能となる。これに伴い前期、早期の時期もさらに古くなり、紀元前四世紀説が強い弥生時代の始まりがさらに古くなる可能性が出てきた。

広瀬和雄・奈良女子大教授(考古学)の話。池上首根遺跡も古く出たが、今回は信じられないほどの結果だ。この通りなら、弥生時代早期の年代も古くなり、紀元前四〇〇年前後といわれる水田稲作の九州伝来も紀元前六、七世紀にさかのぼる可能性がある。